始

帝國圖書館藏

鈴木法琛著

# 安樂集概說

龍谷大學出版部發兌

大正
15. 10. 5
內交

324-41

# 安樂集概說

## 緒言

明治四十年の夏の初、佛教大學に於て、『安樂集』を講し、その草案の概要を鈔錄して、『述要』と名け、之を印刷に附せり、其後幾星霜を歷て、活刷の拙著賣れ盡して今は存せず、此の頃二・三の知友より切に其再版を勸めらるゝに遇ひ、汎漫の解釋、未だ此の集の深義を顯すに足らずといへども、宗學初步の人に於ては、幾分の補助ともなるらんと思ひ、其勸に隨ひ、舊稿を刪補して印刷に附し、『概說』と題せり、然るに拙著の體裁、往々能化時代の古說に伴ひ、

又鎮西・西山の註疏をも參照せしを以て、學轍分裂以後、空華・龍華などの解義に抵觸するものあり、是を以て、先進の老和上よりの排斥又忠告を受けしことあり、故利井鮮妙和上の如きは、明治四十一年、安居本講に、『安樂集』を佛教大學に講ぜらるゝに當り、往々拙著を擧て批判せられたり、後進淺學の吾人の、空華學轍の白眉たる老和上の高批を受ること、誠に身に餘る光榮なりと、窃に喜悅に堪へざるの情あり、されども、老生は常に以爲らく、祖意を尊重するのあまり、自然に宗祖聖人の解釋を以て、直に印度・支那の古聖の釋意と同視し、揣摩臆測をなすが如き、強ちに咎むべきにあらねども、全然史的觀察を沒却して顧みず、道綽禪師の『觀經』講義の會下も、善讓・寛寧の諸哲の『觀經』鑽仰の講座も、同一の情



況なりしものと思ふは、大なる僻事なり、故に古說にても、異流の解釋にても宗義を顯すに便なるものは、之を採りて自家の藥籠中に收めしなり、拙著を讀みたまふ諸彥はよく此の意を以て、拙意を酌酌し、高敎を垂れたまはんことを、切望してやまず、たまたま『安樂集概說』の出版に際し、片言を卷首に冠す。

大正十五年七月

法琛識

# 安樂集概說目次


第一章　道綽禪師の略傳……一
第二章　安樂集の眞宗教義に於る地位……三
第三章　當時佛教界の形勢……七
第四章　諸師の觀經に對する意向……一一
第五章　安樂集の體裁……二一
第六章　觀經と安樂集……三三
第七章　安樂集の大旨……三七
第八章　教興論……四二
第九章　韋提權實論……五一

第十章　宿善論……五七
第十一章　經宗論……六七
第十二章　佛身佛土論……七九
第十三章　菩提心論……八七
第十四章　九番の破會……九八
第一節　總論……九八
第二節　無相偏執に對するの破斥……一〇三
第三節　穢土を願ふて淨土願生を欲せざるの執を破す……一一
第四節　兜率十方の願生に對する破斥……一三
第五節　別時意に對する會通……一四三
第十五章　十一番の問答……一六八



第一節　總論……一六八
第二節　善惡相對門……一七一
第三節　十念々相門……一七六
第四節　上下生相門……一八一
第五節　稱名功德門……一八五
第十六章　聖淨二門論……一九一
第十七章　念佛勝益論……二一八
第一節　總論……二一八
第二節　始終兩益論……二二四
第三節　延年轉壽論……二三一
第十八章　顯勝勸信論……二四〇

第一節　總論……二四〇
第二節　修道延促論……二四五
第三節　指方立相論……二五一
第四節　經住滅論……二五七
第五節　佛性論……二六六
第六節　回向論……二八五
第十九章　結論……二九一



# 安樂集概說

鈴木法琛述

## 第一章　道綽禪師の略傳

安樂集の著者道綽禪師は、今茲大正十五年を距ること千四百六十五年前、支那南北朝の頃、南朝陳の文帝、天嘉三年に生れ唐の大宗、貞觀十九年四月二十七日、八十四歲を以て遷化せられし大德なり。天嘉三年は、西曆五百六十一年、皇紀一千二百二十一年に當る、并州汶水の人にして、姓は衞、十四歲にして出家し、名師を歷訪し、初涅槃宗に入りて涅槃經を講ずること二十四遍、又惠瓚禪

師に隨ふて空理を修習す、後石壁の玄忠寺に入る、寺は曇鸞大師の住する所にして、寺中に大師の碑あり、具に大師の事蹟を刻す、禪師熟視其德化を慕ひ、涅槃經の講敷を捨てゝ、淨土門に歸す、時に、隋の大業五年禪師四十八歳なりき、爾來阿彌陀佛を專念し、『觀無量壽經』を講ずる事二百遍、晉陽・大原・汶水三縣の緇素、其座下に雲集し、彌陀佛名を稱念するに、麻豆等の實を以て數を量り、積て數百萬斛に至る、善導大師の、就て敎を禀られしも此の間のことならん。『安樂集』撰述の年時も、文獻の徵すべきなければ、確たることは知るに由なきも、四十八歳入淨後、『觀經』二百遍の講敷中の事なるべしと想像すれば、恐くは、六十歳前後なるべし、具には續高僧傳第二十四習禪篇迦才の淨土論下、瑞應刪傳・新修往



生傳・佛祖統紀等に傳を載す、今は概略を擧るのみ。

因に、古來禪師を稱して西河といふに就て、玄智は汶水唐の初汾州に屬し、玄忠寺所在の地を西河と呼しより起る、實は鸞師をも西河と稱すべきも、古來のいひならはせにより、綽師の別稱とすといへり。

## 第二章　安樂集の眞宗敎義に於る地位

宗祖聖人の選定したまへる、印度・支那・日本の三國相承の七高僧の中、道綽禪師は其第四位にありて、曇鸞大師と、善導大師との中間過渡の人師なるゆへ、『安樂集』の釋義は、上曇鸞大師を承け、下善導大師を起す趣あり。曇鸞大師は、專ら『大經』によりて、弘願他

力の深義を顯したまひ、道綽禪師は、之れを承けながら、『觀經』に持ち出し、ひろく釋尊一代の經說、天親、龍樹、馬鳴等の菩薩の論文にまで擴張し、偏歸安樂を勤めたまふ聖意を明し、當時の聖道門系統の淨影、嘉祥、天台、等の人々の、淨土敎の解釋に對し、料理簡擇して、往生安樂淨土の法門を、誘他的に宣揚し、其資善導大師の廣開淨土門の地をなしたまへり。　禪師の功業の後を承るが故に、善導大師は、遠慮なく、『觀經』に就て解釋を施し、古今楷定の手腕を揮ひ、定散の要門と、非定非散の弘願念佛との廢立を叫び、言弘願者如大經說とのたまひ、『觀經』を以つて大經に返すの趣を示す。　古人安樂集を評して、此書出ずんば、上曇鸞大師の意を曉ら め、下善導大師の敎義開展の徑路を知るに由なかりしならんと



いへるも、所以ありと云べし。　然れども、此の集の體裁、外聖道門系統の時論に對して、穩和に敎義を料簡し、漸く弘願眞實の淨土門に誘致せんとつとめたまひしを以て、其立言は、多く通佛敎の軌轍に依准せり、故に瞥見すれば、眞宗相承の聖敎にあらざるかの趣あり、細かにその詮顯の義趣を咀嚼するときは、無限の妙味ありて、唯有淨土一門可通入路の眞實義全篇に飛躍せるを見る。之れを達觀せる人を吾宗祖聖人とす、故に老生は、聖人の釋意を指南とし、此の集の義理を窺はんと欲す。　華嚴の鳳潭、『雷斧』といへる書を著して、傲慢にも道綽禪師と、善導大師との師資矛盾を嘲り、天親菩薩と曇鸞大師との異轍を叫びしも、日溪能化の慧眼、よく彼が缺點を摘發し、論難攻擊假借する所なく、彼が所謂雷

斧は、龍車に抗する螳螂の斧なりとて、『笑螂臂』といふ書を著し、鳳潭の說を碎破し、我眞宗相承の法義をして、昭々乎として、日月を懸るが如くならしめたり、其後昆に垂裕するの功、實に大なりといふべし。常に思ふ、宗乘學の祖典の中、この『安樂集』と『往生要集』とは、最も讀みがたく、解しがたきもの故、案文畢義的の俗眼にては、到底妙旨を掬すべからず、桃溪・日溪・抱質・雪山等の先輩の註疏を吟味し、宗祖聖人の釋意を領得し、一隻の眞宗眼を具して、始て讀み得べき書とす、然らずして、輕々に看過せば、誤りて鳳潭の二の舞を演ずるに至らん、若しそれ文字の魯魚、章句の混亂等に至りては、既に千數百年の星霜を經たるの今日なれば、多少の傳訛はあるべし、此の事に就いては、桃溪の『正錯錄』最も力を盡せり、其說悉く服しがたけれども、亦捨つべきの書にあらず。要するに、宗祖聖人の、釋意の重んずべきは勿論、其指南に依るべきは、當然なれども、近古の學說に拘泥して、牽强附會の詭辯を弄することも、亦避くべきことゝ思ふ。

## 第三章　當時佛敎界の形勢

支那佛敎史を講ずるものは、誰も知ることにて、後漢の明帝の時、佛敎東漸してより、三百年程の間は譯經時代にして、宗旨を建て、敎義を弘傳する事はあらざりしも鳩摩羅什の出世の頃より、三論宗の敎義世に弘まりて、南北朝の中頃までは、專ら無相空敎の玄理を翫ぶ人多かりき。是は支那當時の學界には、老莊虛無の

道を講ずる人々が多かりし潮流によりしことなるべし、然るに、虚無自然の說、又無所得八不の談は、妙は則ち妙なれども、吾人の空敎思想は、宗敎の情念を滿足せしむるものにあらず、故にいつしかこの空想に飽きて、實行的方面の徑路を求め、直に宗敎の情念を滿足せしむる實際的行爲を迪らんと志すもの輩出するに至れり。此の時にあたり一方には、達摩大師西來して、直指單傳の禪觀を敎へ、一方には、曇鸞大師出でゝ、天親の『淨土論』の敎義を傳へ他力本願の念佛を宣揚せり、禪と念佛と、共に復雜迂回の觀行をすてゝ、直に心地を開豁する捷徑なるべきも、禪は猶自心を脫却して、絕對不可思議の佛知見に冥合するものなれば、實際は彌陀念佛の至易なるに及ばず。されば こそ、達摩大師と問答



して達し得ず、不識の一語を殘して立別れし梁の武帝も、曇鸞大師の感化を領して、甘露の思をなせしにや、常に其住せられし方面に向ひて、菩薩禮をなし、又魏の孝靜帝は、曇鸞大師を、大巖寺に居らしめ、偏歸西方の所以を問ひ、温讓深信の妙語を聞て、益々其德を景慕せられた、以て當時佛敎界の趨勢の、彌陀念佛に歸向せしこと知るべし、然れども、此の時にあたりて、淨土敎の感化さながら旭日の初光を放ちし如くなれば、其弊害未だ生せざりしも、爾來年一年と、其步武を進むるに隨ひ、淨土の三部修多羅の、次第に世に歡迎せらるゝに至り、淨影・天台・嘉祥・等の說起る、然るに、此等諸師の見る所の彌陀念佛は、曇鸞大師の見る所と、大に其趣を殊にし、敎義の淵源又本質などの差別の、聖道・淨土の間に存する

ことを知らず、『觀經』の觀を、聖道門所談の理事の觀と同一視するを以て、彌陀淨土の往生を期するも、唯生死出離の一便法は、彌陀念佛に在りとして、彼處に至りて、修行尅果の速成を望むものに過ぎざれば、猶是聖道門的理想の分域を出ずして、三部修多羅の眞意に觸れず、荏苒其方向に進み行かば、別途不共の往生安樂の一路、閉塞して通ぜざるに至らん、曇鸞大師の系統を繼紹せる道綽禪師は、此等諸師の謬解を闢きて、本願念佛の正路を闡揚すべく、霧海の南針たるの使命を、世に出現したまひしものなる故に、彼等諸師の愛翫せる『觀經』を本據とし、傍ら諸經論にわたりて、婉曲に其非を矯め、漸く調誘して、寶渚に至らしめんと務めたまへり、故に敎義の說明は、相對的にして、立言の相狀は、通佛敎的なり、古人の、言を通途に准して、義を別途に影すといふもの、當時の情狀より觀察すれば、さもあるべきことゝ思ふ。

## 第四章　諸師の觀經に對せる意向

老生が、爰に諸師と指すは、道綽禪師の、古舊相傳といふものにして、總じては、禪師以前の聖道門系統の人師にして、淨土敎に心を寄せ、註疏などをも作りし方々をいひ、別しては、淨影寺の慧遠・天台山の智顗・嘉祥寺の吉藏をいふ。此の三人は、禪師在世の當時、名聲世に嘖々たりし聖道門の大德にして、淨土敎に心を寄せ、三經の註疏をも作り、殊に『觀經』を愛翫せし人なり、後世慧遠を稱するに淨影といひ、智顗を呼ぶに天台といひ、吉藏を指すに嘉祥

といふは、皆其德を尊敬して、敢て其名をいはず、所居の寺、又山の名を呼べるなり。善導大師は、『玄義分』に、諸師と呼び、三師の代表人物として、淨影の解釋を擧げて對破したまふ、三師の中、淨影最も初に世に出て、且又當時周武の猛烈なる排佛の鋒先に抵抗して、天下の耳目を驚かし、隋の文帝深く歸依して、洛都に淨影寺を建てゝ住せしめたり、又淨土經に對せる解釋も三師の中、比較的周備せるを以て、諸師と標しながらも、おもに此の淨影の說に對せられたり、今も之に准して淨影の『觀經』に對せる意向を述べて、他の二師を之に准知すべきものとして、聊辯論を試みん、前章にも述べし如く、彼等は、出離生死の徑路は、萬善萬行を積累して、竟に成佛に至る外に道なきものとし、其積功累德の容易ならざるを思ひ、內外諸魔の惱亂するを憂へ、或は禪に、或は彌陀念佛に赴きて、其簡易にして理想を實現するの捷徑を、辿らんと欲するものにして、彼等は成佛法と往生法との、根本的相異を認めず、雷に認めざるのみならず、かゝる道理のあるべき事を信ぜざなり、眞宗念佛の正系血脈の人師は、此の如くならず、要するに、此の聖道と往生淨土との、根本相異の基點を知るを、眞宗念佛を體得するの第一正法眼とす、故に淨影等の所謂淨土敎は、禪師の所謂淨土敎にあらず、たゞ〳〵淨土の觀を說くも、餘地の宗旨に沙汰する、事理の觀行との間に、廢立の義あるを知らず、唯事理の諸觀隨分に之を行じて、彌陀の淨土に至り、速得菩提の徑路を辿らんと思ひ、諸行諸觀と共に念佛するのみ、道綽禪師も、淨影の如く、

初は禪に參じ、惠瓚禪師の座下に習學せし人にて、禪師と稱せられ、僧傳にも、習禪篇中に編入せらるゝ程なりしも、淨土教に入りし後は、一向專念の行者となり、よく廢立の義を辨知したまへり、淨影の進道のありさまを尋れば、最初禪に入りしことを、傳に

一夏學定甚得靜樂、身心怡悅、卽以己證用問僧稠、々云、此心住利根之境界也、若善調攝爲觀行、遠每於講際至於定宗、未嘗不讚美禪那

と記し、又淸化にありて、涅槃を祖習することを載す、然れども、彌陀念佛を專修せし事は、傳にも見へず、よりて知る、淨影の如きは、此土入聖の自力行を猛捨して、彼土入證の彌陀弘願他力の念佛に、歸せし人にあらざることを、故に其淨土經の解釋を見るに、彌陀佛を以て應身とし、西方淨土を以て粗土なりとし、因行に於ても、事觀よりも理觀を尙ぶ、彼が著『觀經疏』に、彌陀佛を論じて

佛壽命有眞有應、眞如虛空、畢竟無盡、應身壽命、有長有短、今此所論是應非眞、故觀音授記經云、無量壽佛、壽命雖長久、亦有終極、故知是應、此佛應壽長久無邊、非餘凡夫二乘所能測、故曰無量壽

といひ、又『大經疏』にも

此佛從其壽命彰名、壽有眞應、眞卽常住性同虛空、應壽不定、或長或短、今此所論是應、於應壽中、此佛壽長久、凡夫二乘不能測度知其限量、故曰無量

といへり是眞身は無色無形の眞如の理を指すものとし、西方淨土の敎主たる彌陀如來は、此土の敎主たる丈六の釋迦佛と同種

たる應身佛なれば、無量壽といふも、其實入滅せざる佛といふ義にはあらず、唯釋迦の如き、八十歳にして入滅せる、短壽にあらずして、非常なる長壽ゆへ、不可稱計といひ、無量壽といふのみといふ說にして、報身不滅とする禪師の說とは、大に異る趣あり、是禪師の是爲大失と呵したまふ所以なり。又佛土に就ては

土有二粗妙一、粗處雖二妙、々處唯大一、又復粗國、通有二分段凡夫往生一、妙處唯有二變易聖人一、彌陀淨國、淨土中粗

といへり、是れ『觀經』所說の彌陀の淨土は、二乘も凡夫も在る故、分段生死の境界なりと定めて、勝妙絕超の境界とせざるなり、同じ淨影の撰なる『大乘義章』にも、淨土に事・相・眞の三種を分ち、事土を最劣とし、其中に又二種を分ちて、彌陀土を、娑婆の穢土と、伯仲の間の區別とす。彼が彌陀佛及び其淨土に對せる觀念は、此の如し、故に、聖道と往生淨土との、二門の根本的異點を知らず、彌陀淨土の佛身佛土の觀察が、此の如く卑近なるが故に、其往生の行たる觀佛・念佛の解釋も亦隨つて、禪師又善導大師とは、其撰を異にせり、淨影の著なる大經・觀經の疏を對映して、其釋相を見るに、『大經』は彌陀の所行・所成・所攝化を說くものとし、第十八願の乃至十念は、別に重きをおかず、『觀經疏』に於て、最も因行の觀佛を詳說し、念佛の如きは、觀念佛にして稱念佛にあらずとし、『大經疏』には

此經顯二無量壽佛所行・所成・所攝化一

といひ、『觀經疏』には

此經觀佛三昧爲宗趣

といふ語は禪師と同じけれども、其釋義を見れば、禪師の

若論所觀不過依正二報

とのたまへるとは、大に其趣を異にし、淨影は眞如法界の佛身卽平等虛空の理法身に觀達するを、『觀經』所詮の究竟とす、其應身觀を說けるも、『維摩經』の「見阿閦品」の如き、共世間身、卽差別應身の觀とは異なる旨を主張せり、『觀經疏』に

無量壽者、是所觀佛、就佛有二、一眞身觀、二應身觀、觀佛平等法身、是眞身觀、觀佛如來共世間身名應身觀

といひ、又像觀の是心作佛是心是佛の文を註して、觀の究竟は、法界身卽眞如身のことにして、己心と同體なる佛に、觀達するに在



ることを述べ

就佛觀始終分別、始學名作佛、終成卽是諸佛、法身與己同體現觀

佛持、心中現者、卽是諸佛法身之體、名心是佛

といへり、其觀佛の解釋の、如何に聖道門的にして、冷淡無信的なるかを見よ、畢竟彼等が、彌陀に對し、西方淨土に對する指方立相の觀念は、暫用還廢に過ぎずと考ふるなり、猶淨影等の『觀經』に對せる意向が、禪師並に善導大師と、相異するものを擧れば頗る多し、其中十六定觀とか、福觀雙修とか、定散俱請とか、九品他生とか、四種往生とかいへるものは、其最も著しきものなり、禪師は猶含略的の解釋をなしたまへども、善導大師に至りては、分明に其正邪を剖撿したまへり。史を案ずるに、『觀經』一たび支那陳・隋

の間に愛翫講習せられしより、後世宋・元・明・清の世に及ぶまで、自ら其愛讀者間に、二の潮流を見る。一は淨影・天台・嘉祥より、慈恩・千福・靈芝・雲栖・等に至るの系統と、一は曇鸞・道綽・善導の諸祖より、我日本に流れて源信法然・親鸞の諸聖の、弘傳せらるゝ系統となり、要するに、曇鸞大師の系統に屬する人師は、すべて聖道門の外に、淨土一門を建立し、約時被機して、廢聖立淨の義を明かにし、唯有淨土一門可通入路の始終を詳かしたまふ、於中、曇鸞大師の絶對眞實の釋義を、相對廢立の釋義に移して、他の淨影等の系統の淨土教觀に對し、破立に務めたまふの功績は、禪師と善導大師とに在りて、最も偉大なるものとす。此の事昔日の史談のみならず、現代我國の佛教界にも、此の二大思潮の存するを見る、老生等は、固より曇鸞大師系統の遠裔に浴するものなれば、同感の士と共に、列祖の遺志を發揚し、世の眞如空理の佛觀を尙び、彌陀淨土を輕視する人等に對し、よく其誤點を指斥して、如實の信念に開導せざるべからず。

## 第五章　安樂集の體裁

道綽禪師の、聖道門をすてゝ、淨土門に入りたまひしは、世壽四十八歳にして、入寂は八十四歳なれば、淨土教の行人として、世に存在したまひしもの三十六年、又『觀經』を講ずること二百遍に近しと傳にもあれば、其信念を吐露し經論を解釋せるの筆蹟も、亦鮮少にあらざるべきに、何故にや、千幾百年を歴たる今日にあり

て、其信念釋義を窺知すべき遺著は、唯此の『安樂集』の外には見るべきものなく、七高僧中最も著述の少きは禪師とす。是許多の著書ありしも、中途散逸して後世に傳らざりしものか、將又生涯多く口舌の間に、法門を講說したまひて、あまり之を筆に染めたまはざりしか、文獻の今日に徵すべきものなければ、杳として知るに由なし。善導大師は、禪師の面授口訣の弟子にして、比較的遺著も多く、吾人のその芳躅を追尋するに便利なるも、禪師の唯此の集のみなるは、頗る遺憾に堪へず、加之、其唯一の此の集も、古來其體裁の整理を缺るを疑ふものありて、善導大師に比すれば、議論の多き著述なり、よりて老生古來の學者の、此の集の體裁に就て、其所感を述べし說を一瞥せしに、左の如くの結果を得たり。



一、此の集を以て、未整理の書とせるもの、此の中に又二類あり。

甲、雜亂解すべからずとして、別に自說を組織せし者、

乙、文句を正錯して、其疏通を謀りし者、

二、整理の書とせる者、此中又二類あり。

甲、意義完結、一部始終を成すと考ふる者、

乙、此集の外に、『觀經』の文義釋ありしなるべしと考ふる者、

未整理の書とせる中の甲種は、唐の帝京弘法寺の迦才といへる人の說なり、其著『淨土論』の序に

近代有綽師撰安樂集一卷、雖廣引衆經略申道理、其文義參雜、章品混淆、後之讀之者、亦躊躇未決、今乃搜撿群籍、備引道理、勒爲九章」

といへり、是此の集の不整理なるを遺憾とし、更に教量を求めて、一部の書卽『淨土論』を作るの旨を述ぶるものなり、迦才は唐宋の高僧傳に載せざるの人なれば、其事蹟の詳なることは、知りがたきも、禪師を指して近代といひ、又『淨土論』の下卷に、往生人を列擧するに、禪師を列ねて、善導大師を載せざるより見れば、禪師の入寂を距ること遠からざるの人ならん。然るに、此の集の參雜混淆をいふもの、少く疑を容れざるを得ず、蓋迦才の自著に價値づけんために、禪師を誣るにあらざる歟。

乙種の未整理說は、近古眞宗學者桃溪より起る所にして、純叟抱質・日溪之を繼き、『正錯錄』といふ書の、一時宗學者に喧傳せられたる是なり、其說によれば、此の集もと禪師の觀經講義の胴付けやうのものなりしを、禪師入寂後遺弟の編纂せしものにて、錯簡・脫字・編次等の混亂を來せしものなりといふ。『正錯錄』に

「綽師生平、以講觀經爲業、至老不倦、豈無採其綱要備之講科者耶、但自以爲兎苑冊子、而未出示之、師沒後門人輯綴遺文、草々成卷、流落人間、故有錯簡」

と云ふ、是門人の編纂にして、始より禪師の思惟結構になれるものにあらずば、不整理は免れざるべしと、不整理の罪を、門人に嫁して、禪師を辨護せんとするにあり。兩者左右あるも、此の集を

以て未整理として、完全無瑕の書とせざるに至りては、同一なりといふべし。

第二に整理の書と見る中の甲種は、此の集を以て、一部始終を完結せるものとし、乙種は此の集は文義整理すとはいへども、禪師の意思は、此の集のみにて、完結するものにあらず、此の集は『觀經』の玄義論にして、別に文義釋あるべきなれども、後世散逸して傳はらざりしか、作らんと欲したまひしも、果さずして入寂したまひしか、此の集の初に

今先就第一大門、文義雖衆、九門料簡、然後造文

といへるより見れば、十二大門の一々に、文義を簡料して、隨文釋は後になさんとするの意なるべし、「然後造文」とは、此の集料簡



の後なる、文句釋を指すものにして、善導大師の『玄義分』に

此觀經一部之內、先作七門料簡然後依文釋義

とのたまへるに例しても、知るべしといふ、石泉の『安樂集義疏』に

然後造文四字、局在于此、其意通諸門、十二大門、莫不皆然、並是玄義故

といへるは是れなり、又九門料簡は、第一大門を指し、「然後造文」は第二大門以下を指すとする古學者もあり、解說紛々たり、今老生は此の集を以て、一部始終を完結せる整理の書とし、且禪師の自撰とし、『觀經』を本據とすれども『觀經』の註疏とはせず、「九門料簡」とは、第一大門の標列の文を、「然後造文」とは、第一大門の

釋文を指すとする古說に伴ふ、次章の『觀經』と『安樂集』に至りて辯述せん。迦才の此の集を見て未整理なりとし、之れに滿足せずして、別に『淨土論』を作りしが如きは、老生の頗ぶる不快を感ずる所なり、彼が作れる『淨土論』三卷を見るに、往々淨土敎の眞意を誤る義門ありて、亦是聖道門諸師の伍なるのみ又桃溪等の古哲は我本願寺派の人なるにも拘らず、此の集を以て妄りに門人の追纂となし章句を修刪し錯簡を摘發するに至りては、議論なきこと能はず、絕對的に、古文書の傳寫の誤謬や、錯簡を訂正するを、否認するには非るも、彼が訂正を見るに錯簡脫字などゝせずして解し得らるゝ文字までも、改修するの看ありて、其己れ妄りに祖典を、改竄するの非を掩はんがために、辯を弄して禪師の自撰にあらずなどゝいへるにはあらざるかの疑なきことあたはず。石泉は此の『正錯錄』を罵りて、祖典に不敬なりとし『道安傳』に

經出已久、而舊譯時謬致使深義隱沒未通唯叙大意轉而已

といへるを引きて、古賢の敬意を祖典に表するもの此の如し妄りに改竄し正錯せず、末徒の祖典に對するの禮、亦此の如くせざるべからずといへり。老生嘗て太田錦城の著なる『梧窓漫筆』に韓退之の子泉といへるもの史傳を校閲せしに、金根車といへる文字あるを見て、金銀車の謬なりと速了し、悉く之を改めたりしに、後日『後漢書』の『輿服志』に、金根車の文字屢出たるを發見し慚愧措く所を知らず、世人も之を以て、昌黎の子實に不肖なり

と評したりしことを、載せたるを思ひ、常に子弟を誡て古典の文字に對し妄りに誤謬を叫ぶの輕舉を誡めつゝあり。しかし此の『安樂集』は、最初他宗の人によりて、支那より持來られ、後世鎮西派の義山によりて、考訂重鐫せられて、世に行れしといふ。我宗祖聖人の御所覽の本は、如何なる體裁のものなりしや、知るに由なきも『高僧和讃』に

在此起心立行は　此是自力とぞだめたり

とのたまふは、現行の本に

在此起心願生淨土、此是自力臨命終時等

とあるに對照するに、或は

在此起心、此是自力願生淨土、臨命終時

とありしを義山の校正の際顚倒せしものにて、聖人御所覽の本は、在此起心、此是自力とつゞき、願生淨土の句は、次に臨命終時に屬せるものなりしやも知るべからずといふ古說なども、たしかに一顧すべき價値を存す。よりて老生も强ちに桃溪・日溪等の說を排斥はせざるも此の集を以て禪師の親撰に非ずとし書體の不整理を、妄りに叫ぶが如きは、甚だ好まざるなり。標題の下に釋道綽撰の四字を見る、之を打消すべき强き反證のあらざる限りは老生は禪師の自撰とするの說を信用すべきなり、又此の集文義支離すると見るが如きも是亦考察の足らざるによる、熟讀幾回義脉整然、復間然する所なきを悟らん、故に老生は整理の書にして禪師の親撰なりといふ古說に隨ひ、もし魯魚の傳寫の

誤ありと確認さるゝものあらば之を訂正するも亦妨なしとするなり。



## 第六章　觀經と安樂集

道綽禪師の淨土教を弘通したまふや、其時代思潮に順應し諸師の嗜好に投じ聖道の機を誘引したまふを以て、釋義の趣を見るに『大經』の法門を『觀經』に持ち出し之を本據とし一切經・論を通所依として、唯有淨土一門可通入路の義を詮顯したまふことは上來粗辯述せり。然るに此の集を以て『觀經』の末釋なりとして、或はこれは是善導大師の『玄義分』に比すべきもの文義分は別にあるべきものなりといひ、或は始の第一大門の九章は『觀經』の題目に就て、一經の玄旨を開き、第二大門以下は『觀經』の文義に就て、其要を釋するなりといひ、又此の集は、別して『觀經』に依り通じて諸經論によりて、往生安樂の教を述べたまへるものにして『觀經』の末釋にあらずといひ、古哲の解義紛々たり。いづれも其着想の所據ありて、是非しがたき所なれども、老生は多數の宗學者の『觀經』末釋とする說を採るにも拘らず、崇廓の

今集依二觀經一弘レ敎而非レ釋二觀經一、是故名二安樂集一

といへるを公平なる見方と思ひ、之に贊同するを憚らざるなり。

鎮西派良忠の『私記』にも

知二所求土一、須レ修二願行一、故舉二安樂一、拾二經論文一、記二之筆點一、故集有二二卷一

といへるも、良榮の作れる『見聞』又西山派の貞準の著なる『新鈔』

なども善導大師の『四帖疏』と同一視せず、此の集を以て『觀經』の末釋とはせざるなり、善導大師の『四帖疏』は、題して「觀經玄義分」・「觀經序分義」等と明かに所釋能釋を示したまへるも、此の集は題して『安樂集』と云ひて、『大經』所說の國名を標し此の處に往生するの敎を明したまふに『觀經』及び諸經・論に依りて、其證量を擧げたまひしものなり、故に本文の初には

此安樂集一部之內、總有十二大門、皆引經論證明勸信求往

とのたまひ、敎興章の終には

若欲披尋衆典、勸處彌多、遂以採集眞言、助修往益、

とのたまひ、經宗を擧るにも第一大門は『觀經』に就て

今此觀經以觀佛三昧爲宗

とのたまへども、第四大門に至りては

此彼諸經、多明念佛三昧爲宗

とのたまひ、又

依觀經及餘諸部

とのたまひて、此の別依の『觀經』と彼通依の諸經とを連引して、諸經所讃多在彌陀の義を明し、題號の安樂集といへる義趣を證明し、第八大門に至りて、淨土三部修多羅の外に、廣く所依の經論を列擧したまふ、善導大師の每帖『觀經』を牒標し、玄義を摘發し、章句を追ひ、訓話文義を釋したまふものとは、同視すべからず、『定善義』に

是故諸經中處々廣讃念佛功能

とのたまふものと、前後の文勢同じからず。此の集を『觀經』の末釋とせる說の中、全篇を『觀經』の玄義分とせるは、桃溪・日溪・等より始る、『正錯錄』の凡例に『天台四敎義』を『維摩經』の玄談とするに準じて、此の集を『觀經』玄談と稱せり、又第一大門を玄義とし、第二大門以下を、一經の宗義を釋するものとして、論の釋義・釋宗・釋文の例に準ずれば、釋宗なりと辯ぜしは、東陽閣主の『安樂集略解』にも委曲せり、いづれも解釋に務めたるの趣あり、されども、老生は一部の文勢を研鑽し、其『經觀』の玄談にも、釋宗にもあらざるを見る。

# 第七章　安樂集の大旨

宗祖聖人は、『行卷』の「正信念佛偈」に、道綽禪師の釋功を讃嘆して

道綽決聖道難證　唯明淨土可通入
萬善自力貶勤修　圓滿德號勸專稱
三不三信誨慇懃　像末法滅同悲引
一生造惡値弘誓　至安養界證妙果

とのたまふ、此の八句四行の偈一行づゝ次第に敎行信證の四法に配すべし、蓋し、聖人御已證の四法門、卽七祖傳承の宗要にして、禪師の『安樂集』に於ける所詮の大旨此に在りと見たまふなるべし、第三大門に述べたまふ聖道と往生淨土との二門は、佛敎に

於る二大分岐點より、開展し來る法門教相にして、此の集の要旨なること、後に辯述するが如し、萬善自力の一行は、此の集二門の廢立を述ては『觀經』に依りて、大小乘・世出世・理事の諸善の不堪なることを擧げ、『大經』によりて、十念稱名の勝益を示したまひ、又第四大門には

所修萬行、但能廻願、莫不皆生、然念佛一行、將爲要路

とのたまひ、次に始終兩蓋の具缺を擧げて、貶勸を示したまふをいふ。唯此の二ヶ處のみならず、教興章の五個五百年の『大集經』の文に依りては、定慧等の諸行の末法の時機に相應せざることを明して、稱名の一行のみ相應することをのたまひ、經宗を明しては『觀佛三昧經』によりて、牛頭栴檀の譬喩を擧げ、諸善と念佛とを比較貶勸したまふ、其外集中を一貫して、其義瞭然たり、此の集一部の要旨たること知るべし。三不等の一行は、第三大門に、曇鸞大師の『論註』を承け、三不と三信とを反覆之を明して

具此三心、若不生者、無有是處

と結成したまひ、一部の標文には

引經論證明、勸信求往

とのたまひ、結尾の文には

先發菩提心、同歸向淨國、皆共成佛道

とのたまふ、其信心を勸めたまふの慈誨慇懃なるをいふ、亦是一部の喉襟といふべし。一生等の一行は、語を縱令一生造惡の文に取りて、妙果を顯す、第七大門に、曇鸞大師の『讃阿彌陀佛偈』を

引きて

安樂聲聞菩薩衆乃至虚無之身無極體

とのたまひ第九大門に

後生無量壽國、卽受淨土法身、恒沙無盡不可思議也

とのたまひ、『小經』に依りては、生佛不二の無量壽を明したまふ、此の集第一大門の凡聖通往章より、一部を貫きて、造惡の凡夫、よく妙果を證することを明したまふをいふ、亦是一部の大旨なり。

然れば『安樂集』一部の大旨は、敎行信證を明すに在りといふべし。

然るに、此の四法開けば四法宛然たれども、之を合すれば三法ともなり、二法ともなり、又所詮を能詮に攝めて敎の一法ともなるべし、此の時は、此の集一部の大旨は、約時被機して、聖道と往生淨土との二門を示し、二由一證を以て、聖道門を廢し唯有淨土一門可通入路を立義するに在り。敎興章の初より之をのたまひ第三大門に至て、之を極成し、第五大門以下終に至るまで、其餘意を展開したまふに過ぎず。此の集一部十二大門・三十九章・五十五節經を引くもの四十二、論を引くもの六、一律一讃、文義頗多しといへども北辰の其處にありて、衆星の之に向ふが如く、歸趣する所此の二門を判して、唯有淨土の一敎を詮顯するの外なし、若しそれ一部の筆格を尋ぬれば、義例一にあらず、經に別依・通依あり、說に誘引・詮實あり、念觀混交し、相・無相土を上下兩輩に分ち、菩提心に三種を立て定散の分別理事の差別、一見善導大師の如くな

らざるは誘引の風景を帶るが故なり、唯有淨土一門の實義を述るに至りては、朱紫分明、三經に就て機法二實を辨明す、誰か惑ふ所あらん對外九番の破會あり、對內始終の益の料簡あり、文義前後の照應、法門源流の次第、法德機相の關係等、其義重々なり、以下の諸章に至りて辯述せん。

## 第八章　敎興論

上來講述せる條々は、此の『安樂集』の玄談といふべきもの、是より以下は、此の集の文段を逐ひて、其要義を講ぜん、先初に、第一大門九章の中第一章の敎興論を窺はん、敎興とは、釋迦佛の淨土念佛の敎を說きたまふ所以を尋ぬるものにして、道綽禪師の捨聖歸淨したまふ信仰の根據を告白したまふに外ならず、此の章後の第三大門に於る二門對判して、廢聖立淨したまふ一節と相映じて此の集一部の要旨たることは、前に屢述るが如し、釋迦佛一代所說の敎、皆轉迷開悟の道路を敎へたまふものなるも、聖道門の如きは、其實修に堪能なるの時と機とにあらずんば、其目的を果すこと能はず、此の待時簡機の聖道法に比較すれば往生淨土の敎は、其構成彌陀佛の本願より起りて本來時を待ち機を簡ぶことなく、正・像・末の三時を一貫し、十方を網羅し、如何なる濁惡の世下劣の機もよく適應す、聖道法の己心より起りて、よく修功を積み、漸く佛果に近くものとは、其體格天淵月鼈の差異あり、上代の時機は、聖道門その盛運にあたり淨土敎は其幕下に雌伏する

が如く明したまふやうなれども、よく此の集一部の文を熟讀して約時被機の文意を察すれば、是唯春風駘蕩の時は百花爛漫、松柏却りて其價値なきが如きも其實常盤の綠は、四時一貫毫も變改なし、たゞ秋冬嚴霜積雪の候に至りて、松柏の獨秀の色を現するは萬木の凋落によりて、其固有の翠色の目立ちて見ゆるのみ、嚴霜積雪の時に至りて、始て綠色をなすにはあらず、聖道門には、三時の通塞あれども淨土敎には三時一貫して、すこしも變色なく、たまたま聖道閉塞して門戸無人の時に際し、淨土敎に依るに非ずんば、成佛得脫の道なく、枯木林頭孤月寒の時、獨り松樹蒼々のながめをなすが如くなりと明したまふが、此の集の意なり、末法の時機にあたりては、竿を好む王門に、瑟を執りて立るの愚を學ばんよりは、速かに聖道門を捨てゝ、淨土門に入れよと、自身の實感上より、他を勸化したまふを、禪師の此の集を製作したまふ本意とす。今章の終

若欲彼尋衆典勸處彌多、遂以採集眞言助修往益、欲使前生者導、後々者訪、前連續無窮、不休止爲盡無邊生死海故

とのたまふを見て、其趣を察すべきなり此の約時被機の敎與論は、三經の中『觀經』に依らざるべからず『大經』は十方衆生の信行を誓ひたまふも逆謗の二機を除却し或は東方諸佛國の無數の菩薩の往覲を說き、十四佛國不退菩薩の皆當往生を說きたまふ『觀經』に來りて、身想羸劣の韋提希を相手とし、五逆の人の救はるゝ狀態を說きたまふ之によりて『大經』を見れば、逆謗の除

外は、猶是攝取中の抑止にして、實除にあらざること明白となる
大悲救苦の法味は『觀經』會上に實現す、是禪師の『觀經』に就て、
教興を論じたまふ所以なり宗祖聖人、此の意を襲踏して『本典』
の序に

竊以、難思弘誓度難度海、大船、無碍光明破無明闇、惠日然則、淨邦
緣熟、調達闇世興逆害、淨業機彰、釋迦韋提選安養、斯乃權化仁、齊
救濟苦惱群萌、世雄悲正欲惠逆謗闡提、故知、圓融至德嘉號、轉惡
成德正智難信金剛信樂、除疑獲信眞理也

とのたまふ、然れば此の教興章と、後の二門判釋の文意とを綜合
して禪師の意を窺へば時機相應の『大經』所說の淨土教は、『觀經』
所說の王舍城の騷動により、韋提希夫人の遭難の中に在りて、佛
を請し、說法を求めらるゝを動機として地上に興起す、かゝる大
事を興起する韋提希夫人は權人にあらずば能はずと信じて、韋
提大士とのたまふならん、『智度論』に『般若經』の教興の因緣を
釋して

佛以何因緣故、說摩訶般若波羅密經、諸佛法不以無事及小因緣、
而發言譬如須彌山王不以無事及小因緣而動

といへり、佛の大教を演說したまふ、實に小因緣より起らず、必ず
大事因緣ありて世に現る、今淨土教の興るや、三時徹貫の彌陀念
佛を以て、苦惱の劣機を救濟せんと欲したまふより權人たる韋
提希の手を假りて、地上に興起せしめ三時徹貫の妙教なるが故
に末代の劣機に相應することを明したまふなり。

前にも述る如く、末代の時機に相應するは、教の卑近なるが故にあらず、猫兒の前に、黄金と鰹節とを並べんに、猫兒は必ず黄金を捨てゝ鰹節を取らん、嬰兒の前に、百圓の貨幣と饅頭を置き、任意に之を取らしめば、必ず貨幣をかへりみずして、饅頭を手にせん、此等は皆識別の智識の淺劣なるがためにして、黄金と貨幣とが、鰹節と饅頭より勝れたることは、依然として變せず、然れども、彌陀念佛の劣機と末代とに相應するといふは、猫兒に鰹節、嬰兒に饅頭の如く、法の劣なるが故に相應するにはあらず、聖道・淨土二教の廢立に、約法の廢立あり、約機の廢立あり、此の集は、時機誘引のために主として約機廢立の說をなしたまふといへども、淨土の教體の淺劣を意味するにはあらず、故に



念佛三昧、卽是一切三昧中王故也

とのたまひ、又

諸淨土中、安樂世界最勝也

とのたまふ、此の意を得て、此の集の文を見れば、初に

若教赴時機易修易悟、若機教時乖難修難入

とのたまふ、「教赴時機」とは淨土教を「機教時乖」とは、聖道法を指す、赴とは投合の義にして、淨土教は彌陀佛の超世の大願より成就して、本來よく時機に投合す、實は如何なる時、如何なる機にも投合すべきも、末代の時機最も其特色を見る故に、修しやすく悟りやすし、もし機より修成して、教に接近する聖道法の如きは、修し難く入りがたしといふ意ならん、崇廓は此の義を述べて『安

樂集覆述』に

淨土門者、自〻教而合〻機、聖道門者、自〻機而合〻教、自〻教而合者易、自〻機而合者難喩如〻有〻刀而作〻鞘者易、有〻鞘而後求〻刀者難也

といへり、至言といふべし、然れば、禪師の約時被機をのたまふ意は、聖道の法は三時通塞あれども、淨土の教は始終徹貫す、故に聖道法の通運に際しては、淨土教の特色見へがたきやうなれども、其塞運にあたりては、挺然出格の面目を現はすをいふものにて、淨土教に通塞ありといふにはあらず、宗祖聖人は

正像末の三時には　彌陀の本願ひろまれり

像季末法の此世には　諸善龍宮に入りたまふ。

像末五濁の世となりて　釋迦の遺教隱れしむ



彌陀の悲願ひろまりて　念佛往生さかりなり。

と歎じたまふも此の意なり『化土卷』にも

信知、聖道諸教、爲〻在世正法、而全非〻像末法滅之時機、已失〻時乖〻機也、淨土眞宗者在世・正法・像末・法滅、濁惡群萌齊悲引也

とのたまへり、大旨は禪師も聖人も撥を同ふすといふべし。

## 第九章　韋提權實論

『觀經』は、韋提希夫人の定善致請に始まり、釋迦佛の散善自開に至り、定散と念佛の廢立を以て究竟す、然れば、韋提希夫人は、觀經會の發起主なり、故に、此の集教興章の末段に

是以、韋提大士、自爲及哀〻愍末世五濁衆生、徒受〻痛燒、故能假遇〻苦

緣濟開出路豁然

とのたまふ、大士とは菩薩の譯語にして、又假苦緣とのたまふ禪師の意を察すれば、韋提希夫人を以て、我等と同じき凡夫とは見たまはず、悲泣雨涙と說き、心想羸劣と說けるは、是權假方便の示現相にして、實際は菩薩なりと見たまふ語勢なり、然るに、其資たる善導大師は、夫人を實際の凡夫なりと見たまひて、『序分義』に、經の心想羸劣の文を釋して

夫人是凡非聖、由非聖故、仰惟聖力冥加

とのたまふ、又夫人を以て權化の人とすることは、諸經論にも見ゆる說にして、淨影・天台・嘉祥等も之をいへり、宗祖聖人は、『本典』、『略書』等にも、屢權人とし、別して和讃には、之を主張したまふ、諸



師と禪師と、聖人と、同一の權人說なるも、其意趣は同か異か、善導大師の凡夫說は、權人說と長く相容れざるものなるが、此等の義を分別せんとするに、先諸經論の說を擧れば、『心地觀經』に

韋提希夫人、勝鬘夫人等、已善入無量正定、爲度衆生示現女人

と說き、『勢至經』（決智鈔による）に

我於四十年以後、說淨土法門、是韋提菩薩恩德也

とのたまひ、『涅槃經』には、夫人のみならず、提婆達多をも

提婆達多、實非聲聞緣覺之境界、只是諸佛所知見

と說き、『入大乘論』にも

提婆達多、是大賓伽羅菩薩、爲遮衆生起逆罪故、作三業墮於地獄

とのたまひ、『普超經』には、阿闍世王を權人として

阿闍世王、卽入卽出=於地獄-生=上方-得=無生忍-

とのたまひ、其の他經論にも、夫人のみならず、觀經の會座に關係の人を、すべて菩薩の化現相としたまふもの多し。此の經論の說は、見方も種々あるべし、次に淨影・天台・嘉祥等の權人說を見るに、淨影の『觀經疏』に

韋提夫人、實大菩薩、此會卽得=無生法忍-

といひ、天台も

韋提實大菩薩、此會卽得=無生忍、示=同凡夫-

といひ、嘉祥も

論=三聖之迹、有=淺深之殊、論=本意趣-無=殊異-

といへり、三聖とは、頻婆沙羅と、韋提希と、阿闍世との三權人を指す、此等諸師の權者說と、禪師の權者說とは、其言同ふして、其意大に異なり、諸師は『觀經』所說の機を、高度の人となさんがための論なり、故に善導大師は、凡夫說を主張して、彼等の說に瞞着せられて、凡夫往生の路を塞んことを恐れて、諸師に抗辯したまふ、禪師も縱令一生造惡の機を、淨土敎の正所被としたまふより見れば、善導大師と異ることなし、其權者と見たまふものは、敎興の主人公なるより、此の如き大事を興し、未來世濁惡の衆生を憐愍して、『觀經』の慈誨を惹起さしめたまふ功績は、淨土出現の大菩薩の力用なるべしと、敎興の因緣を推して、夫人を權人と見たまふ、此の禪師の意趣を承て、具體的に之を展開し、觀經會上に現はるゝ人々門番までも權者と見たまふを宗祖聖人とす、「觀經和讃」

に、初めに十五聖を列ね、後讃文に至りて

彌陀釋迦方便して　阿難目蓮富樓邦韋提達多閻王頻婆娑羅

耆婆月光行雨等。

大聖おのおのもろともに　凡愚底下の罪人を

逆惡もらさぬ誓願に　方便引入せしめけり。

と嘆じたまふ、禪師や聖人の意を窺へば、非常の人に非んば、非常の事をなし得ざるの道理なれば、教興に參預せるの人々は、決して尋常一樣の凡夫にはあらざるべしといふ信念より起る權人論なり。要するに、韋提希夫人の如きは、內德よりいへば權人にして、外相よりいへば凡夫なり、內德權人に非んば、大教を興すこと能はず、外相凡夫に非んば、惡人往生の先達をなすこと能はず、



禪師と聖人は內德より論じ、善導大師は外相に據りて論じ、以て諸師の得忍を以て、高機と見るに反對したまふ、大師の所謂得忍は、諸師の所謂證理得忍にはあらず、くわしくは『序分義』を研尋して知るべきなり、宗祖聖人も、凡夫往生の先達として、夫人を見たまふときは、『化卷』に

言「汝是凡夫心想羸劣、則是彰」爲「惡人往生機」也

とのたまふ、禪師と大師と聖人とは、左右逢原の言論といふべく、諸師に對せば、禪師も聖人も、皆大師の說に左袒したまふべし。

## 第十章　宿善論

此の『安樂集』の第一大門九章の中に、第一に教興を明して、勸歸

淨土を以て結び、第二に說聽方軌を述べて、歸淨の精神を喚起するに、六個の經論の文を擧ぐ、其中第一・第二は、正しく說聽の方軌、第三文は說聽の利益を說き、第四以下は聞法の宿因を述ぶ、此の如く、未來の利益を說き過去の宿因を述るものは、現在の聽者をして、希有の思想をなさしめんがためなり、宿因の一文は、後の三恒値佛の文に聯絡す、三恒値佛の一章は『涅槃經』に依りて、遠近の宿因を明し、以て第二大門破會章の別時意會通の本を張る、文字前後の照應聯絡見るべきものあり、迦才の章品混雜・文義參錯といふ、笑ふに堪へたり、三恒値佛發心の一章は『涅槃經』「四依品」に依り、其八恒河沙の中、第四恒河以下は師位の人の宿因なるが故に、此の集約時被機の釋意に疎し、故に弟子位たる三恒河を擧げて、宿因の證文にあつるなり、後の別時意會通に至りては、更に之を攝略して半恒一恒のみをあぐ、要は、淨土教値遇の因緣、彌陀念佛の宿善を知らしむるにあり。

宿善又は宿因・宿緣・宿福・宿習ともいふ、獲信の爲の過去の因緣をいふなり、宿善の語は、此の集所引の『大經』に

若人無善本、不得聞此經、

とのたまふに依る、熟語は『往生要集』下末に

前世欣求淨土、念彼佛者、宿善內熟

とのたまふ、是其典據、宿因は此の集別時意會通の文中に出て、宿緣は『序分義』に

但以宿緣有遇得會慈尊

とのたまふ如き、是其所據にして、宗祖聖人も、遠慶宿緣とのたまふ。宿福の語は『大經』に、宿習の語は『觀經』に出づ。此の中宿善・宿福は、其體より名を立て、宿因・宿緣・宿習は用より呼ぶ、其指す所は一なり、佛敎は因緣を尙ぶ、小事に小因緣あり、大事に大因緣あり、出離の大事を解決す、豈大因緣なからざるべけんや、是宿善論の起る所以なり、然るに、淨土敎に於る願力の不思議力は、如何なる機をも救ふといふを以て、古昔無宿善往生を立るものあり て、諍論せしことあり、淨土宗西山派顯意の著せる『楷定記』に

如來四悉隨宜、今此二文、當其對治爲人之意、若入佛智第一義門、無善凡夫直入佛家、無問罪福時多少也

といへり、是は『定善義』地觀の釋に、『平等覺經』の二文を引て、宿善・宿殃を明したまへるを、四悉檀を以ていへば、對治悉檀・爲人悉檀の重にして、第一義悉檀を以ていへば、無宿善の機も、如來の救濟に預ると解釋せるなり、眞宗にては、大谷南殿の唯善房と、北殿の覺如上人と、無宿善往生の得否を論じ、北殿の宿善往生に限るの說勝利を得たること、『慕歸繪詞』第五卷第一段『最須敬重繪』第五卷第十八段に出づ、宗祖聖人・蓮如上人、皆此の宿善を談じたまふ、絕對他力をいふ眞宗は、宿善往生を主張し、二類往生・一類開會をいふ鎭西・西山の人にして、無宿善を立る者あり、矛盾に似たり然れども、よく研尋する時は、眞宗の無宿善往生を許さゞるもの深致あり、以下講述する所、其趣を顯さん。

別途不共の弘願念佛は超世希有の法なるが故に、おぼろげの因

緣、能く之に遇ふことを得ず、宿善純熟の者にあらずんば、趣入すること能はず、凡そ、教は頓入の度の進む程、それだけ教は卑くなるものなり、華嚴天台の法門は、圓頓なりと雖、その圓頓の法に入るには、種熟達の次第を說き、或は種索・情索・口索の求法見聞位を經て、解行位・證位の順序を說く入道の路程容易ならざるは、是法の尊高なるが故なり、今無宿善の往生を許さざるときは願力無窮にあらざる如しといへども、之を誘引して宿善純熟の機に仕上げ、弘願に向はしむる亦是願力の作用たるべければ、願力無窮たることを失はず、此の集宿因多刼を談ずるも、卽是座下聞法の尊特を知らしめんがためなり、故に發心供佛を明し終りて

顯大乘經之威力不可思議

とのたまふものの知るべし。

宿善の體は、何物かといふに就て、古來總別を以て論じ、總宿善は、汎爾結緣の聚沙作佛、又歌曲の念佛等をいひ、別宿善とは、他力攝生の願力を指すといひ、或は宿善はすべて大悲調熟の佛力を指すといひ、義說紛々たり、此の集及び善導大師の『定善義』等の釋意を窺ふに、宿善はすべて自力の善なり、之を薰育して、弘願に向はしむるは、佛の光明力にして、宿善の體にあらず、或人宿善の宿を解して、鶯宿梅の宿とし、他力の久しく身にやどりたまふを、ふとするものあれども、宿善の宿は、宿泊・止宿の宿にあらず、此の集三恒値佛の聖道善を指して宿因とのたまふより見れば、宿は宿昔の義にして、聖道善、又は曾て修せし念佛の因緣となりて、弘

願念佛に達せるをいふものにして、すべて自力修善を以て體とす、故に往生に向ひての因緣は、弘願念佛にして、獲信の因緣は宿善なり、足場を作りて家を建るが如く、家成就すれば、足場は不用にて撤廢す、宿善は獲信の因緣なり、獲信の時至れば、宿善は不用に歸して廢せらる、『最須敬重繪』に、宿善往生といふべきやの問に答へて

宿善の當體をもて往生すとは、始より申さねば、宿善往生とかけりおほせらるゝに及ばず、往生の因とは、宿世の善もならず、今生の善もならず、教法に遇ふことは、宿善の緣にこたへ往生をうることは、本願の力による

とのたまふにて知るべし。



宿善・宿因と稱すべきものゝ種類を擧れば、一・二にあらず、沙を聚めて佛像を作り、禮拜供養をなす小兒の遊戯も、歌曲にあらはるゝ念佛等は、佛緣を繫ぐ、汎爾結緣といふべけれども、世・出世一切自他を潤益することなければ、善と名くべきものにあらず、『觀經』に三福を結んで

三世諸佛淨業正因

とあれば世善の如きは、遠宿善といふべく、『化土卷』に

明謙守寶乃登聖之階梯三畏五常爲人天之由漸

とのたまふ、然れども『序分義』に分別したまふ如く、正法を誹謗し三寶を毀斥して、行ふ所の忠孝などは、宿善に攝すべからず、此の集の記載によれば、出世善のみを以て宿善とせり、是正く宿善

となるべきものを擧げて、之に從屬すべき世善等を略するなり、此の中三恒値佛等の聖道善は遠宿善にして、要門・眞門の淨土善は近宿善なり、此の集に引く『大經』の

清淨有戒者乃獲聞正法

は、十九願の修諸功德の攝屬にして『觀經』開說の要門三福の隨一なるべし、

若人無善本、不得聞此經

とのたまふは、宗祖聖人の如く、善本を彌陀名號とすれば、『平等覺經』の

過去已曾修習此法、今得重聞、卽生歡喜

の文を、『定善義』に引きたまふと同じく眞門なるべし、『化土卷』



に三願轉入を明したまふよりいへば、要・眞二門は、弘願に入るの近宿善といふべし然れば、此の集にのたまふ宿善・宿因は、遠くは聖道、近く要・眞二門の善を指したまふといふべし。

## 第十一章　經宗論

凡佛所說の經種類頗る復雜にて、所詮の法門亦多岐なれども、先其主義要旨の那邊にあるかを考察し、之を捉へ來りて、經を熟讀せば、序・正・流通條理井然として、難解の文義も、自ら破竹の勢にて會得せらるべし、是古來三國の論師釋家の、經を解說するに、その宗體を議する所以なり唯識三論華嚴・天台・等釋家、宗體を分別するに、其釋相參差あれども、今道綽禪師の經宗論に其關係の深か

らざれば、之を省ていはず唯此の集に現れたる言説に就て、禪師の宗旨と指したまへるものは、如何なる法門なるかを研尋せん。宗旨といへる語を、或人は、經の要義の尊崇すべきものを宗とし、其宗の歸趣を旨といふと解し、又或人は經の要旨の、尊崇すべきものを宗旨といふ、宗卽旨にして、宗と旨とは別の所顯あるの語にあらずといふ、今此の集の所詮に就て窺へば、宗卽旨にして、別義なしと見るを妥當とすべし。

此の集經宗を明せるの一章は、造句は全く淨影の『觀經義疏』を模倣したまう、禪師歸淨の前、三十二歳の頃、淨影は七十歳を以て入寂す、禪師四十八歳歸淨の頃は、淨影の遺著たる『義疏』は盛に世に行はれたりしなるべし、禪師の准通立別の筆勢、其『義疏』の



造句を倣ひ、義を別途に立て、『觀經』の宗より筆を起し、第四大門に至りて、彼此の諸經に涉りて、念佛爲宗を明す、其意を用ひたまふの跡想ふべし、『義疏』の文に

第三須知經之宗趣、諸經所辨、宗趣各異、如涅槃經、涅槃爲宗、如維摩經、以不思議解脫爲宗、大品經等、以慧爲宗、華嚴經・法華經・無量義經・等、三昧爲宗、大集經陀羅尼爲宗、如是非一、此經觀佛爲宗

とあり、『義疏』を以て此の集に對照するに、禪師が彼の文句を模倣したまひしこと分明なり、唯彼の『華嚴』・『法華』・『無量義』・等三昧爲宗の句を省き、彼の『大品經』の宗を慧とのみいへるを、集は空の一字を加へたるのみ。

文字は、此の如く模倣したまへども、義は全く彼と異りて、彼は標

して『觀無量壽經義疏』といへば、一經の末釋なること論なけれども、此の集は「今此觀經」と、別依を標しながら、釋文は『觀佛三昧經』によりて念佛三昧を明し、更に第四大門に至りて

第二明、此彼諸經、多明念佛三昧爲宗、就中有八番

とのたまひ、此の『觀經』と彼諸經とに通じて、其宗旨を述ぶ、然れば、第一大門のみを見れば、淨影と同じく『觀經』の宗を釋するが如きも、第四大門と對照すれば、禪師の意別依の『觀經』も、通依の諸經も、皆觀佛・念佛三昧を以て、經の宗趣とするものなることを明す、又其觀佛といふも、淨影等の所謂事より理に達するの觀にあらずして、唯事觀なり、故に

若論所觀不過依正二報

とのたまふ、然れども、禪師は猶誘引の風景を帶びて、溫和なる言說を以て、彼等に對したまへども、善導大師に至りては、露骨に淨土門の眞意を披攄し、『玄義分』に

今此觀經、卽以觀佛三昧爲宗、亦以念佛三昧爲宗

とのたまひて、觀佛と念佛とを別論し、『散善義』に至りて、廢觀立念の義を明示し

上來雖說定散兩門之益、望佛本願、意在衆生一向專稱彌陀佛名、

とのたまふ、此の釋を以て、此の集に對照し、觀・念兩三昧の同異を論ずる古來宗學者間の異說紛々たり、石泉の如きは、禪師も善導大師も、共に兩三昧を別論し、廢立するものとし、第一大門の觀佛の宗旨は所廢に屬し、第四大門の念佛爲宗は能立を示す、此の廢

立は、一部の骨子にして、第一大門の第一章には

計今時衆生、卽當佛去世後第四五百年、正是懺悔修福、應稱佛名號時

とのたまひ、第三大門に至りて、二門を分別し、唯有淨土一門の義を述べて、大乘・小乘・世善の諸行を羅列して、其不堪を示し、淨土所被の實機を明して後、諸佛同勸の念佛を擧げ

但能繫意、專精常能念佛、一切諸障、自然消除、定得往生、何不思量都無去心也

とのたまふ、此等の文意を窺ふに、觀佛を廢し稱念佛名を以て、唯有淨土一門の義を成立せしめたまふ、善導大師の兩三昧爲宗を立てゝ、廢觀立念したまふは、此の集の說を承け、祖述するなりと



いふ、石泉の著『義疏』に

一經之宗雖存其二、而今部旨仍在稱名、可以見而其性溫至今明宗、不欲相爭、且云觀佛三昧爲宗、第四大門則曰念佛三昧爲宗、此觀佛永不存、終南分兩三昧、往々廢其觀佛、立念佛者承今師也

といへり、此の解釋も亦一理あり、然れども、老生は別に見る所ありて、此の說に隨はず、抑、此の集は、曇鸞大師の『論註』と、善導大師の五部九卷との中間過度の釋義にして、『論註』所詮の『大經』を本據として、三經の通申せるの釋義を、佛敎全體の諸經・論に持ち出し、『觀經』を本據として、諸經・論の彌陀念佛を明すを、佛の本意とすることを述へ、聖道・淨土の名を立て、約時被機して、往生安樂の敎を說破せしは、善導大師の、特に『觀經』を解釋する廣門淨土門

の、要・弘廢立の義說とは、其趣同じからず、其『論註』を承けて、之を相對の舞臺に提出するが故に、釋義の骨子は『論註』より來る『論註』に論の五念門を釋する、其第二念の讃嘆門に、如實の稱名を明し、第四念は卽觀察なり、五念を概括するは念佛なり、一の念佛を開て五とす、故に五念門といふ、五念卽一念佛にして、皆弘願眞實の行なり、善導大師の『觀經』を釋して、眞假廢立するものとは同じからず、故に、此の集汎く一代佛敎に涉りて、二門廢立すといへども、其所謂觀佛も念佛も稱名も、皆弘願眞實の行を詮するの名とす、唯准通と立別の名に左右あるのみ。

凡そ、觀佛・念佛の解釋に就て、聖道の諸師、淨土の列祖其釋相左右あり天台の如きは、觀佛・念佛の間に助正を分別し、觀正念助をい



ひ、又或人は、念佛・觀佛を一法の異名とし、共に心想を顯すものとし、或人は觀佛を以て弘願とし、又或人は、要門とす、淨影・天台・嘉祥等より、眞宗先輩に至たる『觀經』の註疏を歷覽するに、其の解釋頗る多し、今禪師の釋相を窺ふに、念佛とのたまふものは、心念と口稱とに通じて、共に弘願として、觀佛亦念佛といふ、平生の行人に在りては、此の觀佛・念佛の行を修すべく、稱名の行は、平生・臨終に通じ、臨終の機は唯稱名としたまふ、此の經の宗旨を明したまふ所の觀佛・念佛は、之を別見せず、故に第一大門には、觀佛三昧と標して、其說明には『觀佛三昧經』によりて、念佛三昧の功能を叙し、第四大門には、念佛三昧爲宗と標して、釋には八部の經論を擧げ、一相三昧・一行三昧等の心念・口稱を混說したまふ、又廣施問答・

釋去疑情の一節には、十念を釋するに就て『論註』によりて、心念の觀と、口業の稱名とを擧げて

憶念阿彌陀佛、若總相若別相、隨所緣觀、選於十念、無他想間雜、是名十念

とのたまひ、又

但能積念凝思、不緣他事、使業道成辨、便罷

とのたまひ、又

或念佛法身、或念佛神力、或念佛智慧、或念佛毫相、或念佛相好、或念佛本願、稱名亦爾

とのたまふ、十念念佛の心口に通ずることを知るべし、古來の宗學者の中には、『行卷』に此の集の『觀佛三昧經』引證の文と、廣施



問答の『論註』引證の文等とを引て、稱名行の證文とし又此の集に引く『論註』十念の釋にも、時の十念とする義を排し、更に二個の但の字を以て、次第に簡びて、憶念觀想の義をも簡去して、稱名を取りたまふより見れば『論註』も『安樂集』も『行卷』も、十念を稱名と取りたまふならんといふ者あれども、『行卷』の釋は、宗祖聖人の隨義轉用なるべく、又『論註』二個の但の字は、次第に簡去するにはあらず、時に約するの念は、在文分明、之を簡去したまへども、觀稱の二は、亦復如是とのたまひて、之を並取す、漢文の法としても、但を以て但簡去するの例を見ず、故に二個の但の字は、共に時を簡去し、心念と口稱とを以て、十念の念とするを『論註』の釋相とし、禪師は之を承用したまふ、然れば、口業の稱名、意業の觀

察、之を統括するは念佛なり。

十念々佛、便得往生

とのたまひ、又

同一念佛、無別道故

とのたまふ如きは、心念・口業を概括せる念佛をいふ、若又

但以稱佛名力、作往生意願生彼土

とのたまふ如きは、察機轉教の『觀經』下々品に明す稱名なり、然れば、此の集の觀佛爲宗・念佛爲宗は、一弘願行相の上に就ての行をいふ、別視すべきものにあらず。



# 第十二章　佛身佛土論

此の『安樂集』第一大門標列には、眞・應の二身二土を擧げ、釋文に至りて、第七章に法・報・化の三身三土を擧げ、是報非化を以て、諸師の謬解を排し、第八章に凡聖通往の義を料簡して、相・無相の二土を出し法性法身・方便法身の二佛身に及び、第九章に三界の攝否を料簡し、以下屢相・無相の因果を述べたまふ、此の中是報非化の一節諸師の謬解を破斥するの義勢は、條理最明晰にして、「是爲大失」の一刀裁決の語、重きこと千鈞なりといへども、相・無相の義趣に至りては、准通立別の意向測りがたく、難解の文句頗る多し。今先是報非化の義を窺へば、諸師の安樂世界を、釋迦佛の應化の

身土と例同するを排斥し、釋迦佛の如きは、無勝莊嚴の報土ありて、此處に報身の果を占め、度生の爲めに、娑婆に應現すること『涅槃經』に說くが如し、若彌陀佛の住する安樂世界を應化土とし、其佛を應化身とせば、彌陀佛の報身・報土は、何處に在りて、何と名くるや、說て何經にありや、彌陀佛をして、本籍故鄕なき旅人の如く見るや、若又『大經』所說を、彌陀佛の報身報土とすれば、彌陀佛の應化の身土は、『鼓音聲經』所說の淸泰國を以て之にあつべし諸師の安樂世界を以て、彌陀佛の應化の身土といふもの、其理なく、其證なしと破斥したまふ、此の淨報穢化の義を以て、諸師に對抗したまふもの、事理分明なり、然れども、相・無相の身土に至りては、文義甚了解しがたし、第一大門第九章に、凡聖通往の義を述て



凡夫智淺、多依相求、決得往生、然相善力微、但生相土、唯覩報化佛也

とのたまひ、第二六門第二破會章に

法性淨土、理處虛融、體無偏局、此乃無生之生、上士堪入、乃至有中下之輩、未能破相、要依信佛因緣、求生淨土、雖至彼國、還居相土

とのたまふ如き、文を一見すれば、前の三身三土章にのたまふ如來眞法身者、無色無形、無現無着、不可見無言說、無住處、無生無滅、是名法身義也

は、法身の佛にして、其佛の境界を、法身の土といひ、之を今無相の土といふが如く、此の眞如法性を指して、能證の佛よりいへば、佛の自體にして、其所住の義よりいへば、土といふべし、此の眞如法

性に直達するは、有相の凡夫の能はざる所にして、唯地上淨心の菩薩のみ入る境界なり、形相に依りて願生するものは、智慧も淺く、其力用も微薄なれば、佛願によりて往生はすれども、無相法性に達すること能はずといふに似たり、若然らば、唯有淨土一門の、一生造惡の凡夫の稱名は、有相の善にして、相土に生じて、報身體上示現の化佛を觀ることゝなりて、一向專念深厚善根の衆生は、往生して報佛を觀て、永く入滅の佛を觀ずとのたまふ、三身三土章の『觀音授記經』の會通も、第四大門始終兩益の文も、矛盾して、指方立相の教は、程度の低きものとなる、もし又相土は、宗祖聖人の所謂化土のことなりといはゞ、眞實報土は、依正三嚴二十九種の色相あり、無相とはいひがたし、古來の宗學者、種々の異說ある



は、其文相此の如く難解なるに由る、然れども、此の相無相の土を解するには、よく此の集の文を一部徹覽し、凡聖通往章の終に『論註』の二種法身の文を引きたまふより、第二大門廣施問答の凡聖皆往の分別等を翫味し、第七大門此彼取相の第一章の料簡を指南として研尋せば義趣瞭然たることを得べし。彼章に

依大乘諸經、皆云無相、乃是出離要道、執相拘礙、不免塵累、今勸衆生、捨穢忻淨、是義云何

との問を出し、其答の文に

凡相有二種、一者於五塵欲境、妄愛貪染隨境執着、此等是相、名之爲縛、二者愛佛功德、願生淨土、雖言是相、名爲解脫、乃至彼淨土所言相者、卽是無漏相、實相相也

とのたまふ、此等の料簡に依りて考れば、無相の土に二種あり、一には廣略相入の相は

法身無相故、則能無不相、是故相好莊嚴、卽是法身也

とのたまふが如きをいふ、相を全ふして無相なり、宗祖聖人は、之を眞實報土とのたまふ、二には廣門差別に止るものは、禪師ののたまふ報身體上示現の相、聖人の所謂方便化土なり、其因をいふも亦然り、因緣假名生を知りて、願生する聖者も、實生は執すれども、所聞の名號に、無生卽生の德を具したるが故に、相卽無相といはる、故に凡夫の弘願眞實の信心亦無相善なり、又有相の因をいへば、執相拘礙の自心の染着の離れざる要門・眞門の行者は、往生はすれども、廣門差別の一偏に止る、化土に入り執相の因力微な



る故に、報化佛を見る、もし自己の執相を離れて、願力を領するものは、無相卽相の土に入りて、如來の報身を觀るなり、凡聖通往章の文の如きは、此の執相拘礙の因果を擧るのみ、又法性淨土、上士能入等の文の意は、假名生を知りて往生する聖者と、執相の行者とを擧げて、上輩と中下輩とに區別するなり、委くいへば四類あるべし。

- 一　相卽無相……報土
- 二　相の一偏に滯るもの化土　　果
- 一　無相善……因……是眞

此中に二ありて、一は假名生、一は實生にして、無生の法德を具する者、此の二は是上輩生なり。

一一二　相善……因……是假

凡聖を問はず、自善執相の行者、是中・下輩。

猶委曲は、後の十一番の問答の解釋を參照して知るべし。

因に解釋せば、第一大門標列の眞・應身土と、釋文の三身三土とは開合なり、法・報を合せて眞とし、應を化身土とす、報に二種の見方ありて、所居を以て、能居の佛を辨定するを、淨報穢化の見方とす、報土に住する佛は報身にして、穢土に示現する佛は化身なり、是禪師の諸師の謬解に對したまふ解釋にして、之を通報通化といふ、諸佛に通ずる義なるが故なり、又四十八願に酬報する佛身を報身といひ、淨土中に示現する佛身を化身といふ、此の集にていへば、凡聖通往章に



由佛願故、乃該通上下

とのたまふは、四十八願酬報の義にして

生相土觀報化佛也

とのたまふは、淨土中の示現相にして、機より感見す、宗祖聖人此の二を報化と判ず、之を別報別化といふ、又法性淨土といふは、全性修起の報土を指し、『論註』の二種相卽・廣略相入の土をいふ。

## 第十三章　菩提心論

第二大門に三章ある中、初の菩提心は、名を通佛教に立て、義の歸趣する所は、淨土願生の心を顯すにあり、菩提心の義は、宗旨によりて異れども、名はすべての教派に通ず、故に、法然上人は、『選擇

集』に

天台卽有四教菩提心、眞言卽有三種菩提心、華嚴亦有菩提心、三論・法相・各有菩提心、又有善導所釋菩提心、發菩提心、其言雖一、各隨其宗、其義不同

とのたまひ。宗祖聖人は『信卷』に

就菩提心、有二種、一者竪、二者横、又就竪有二種、一者竪超、二者竪出、竪超竪出、明權實顯密大小之敎、歷刼迂迴之菩提心、自力金剛心、菩薩大心也、亦就横復有二種、一者横超、二者横出、横出者、正雜定散、他力中之自力菩提心也、横超者、斯乃願力迴向之信樂、是日願作佛心、願作佛心、卽是横菩提心也

とのたまふ。此の『安樂集』は、言を通途の菩提心に立てゝ、願度の



二心に及び、後の十一番の問答と照應して、三心一心の別途を顯すなり、其源に溯れば、淨土三部の修多羅中、此の菩提心の名を以て、眞假兩面の心念を表顯せり、是此の集の依據といふべし。『大經』第十九の願に

設我得佛、十方衆生、發菩提心、修諸功德、

と誓ひ、第三十五の願に

設我得佛、十方無量、不可思議、諸佛世界、其有女人、聞我名字、歡喜信樂、發菩提心、

と誓ひ、三輩章の文には

而作沙門、發菩提心、　當發無上菩提之心、

と說く、此の中第三十五願の菩提心は、弘願他力の信樂を菩提心

といひ、第十九願の菩提心は、自力發起の菩提心をいひ、三輩章の菩提心は、自力とも他力とも見らるゝ兩面の義を含む、曇鸞大師は、是より願作佛心・度衆生心を開出して、弘願眞實他力の信心を顯す名とし、法然上人は『選擇集』に之を餘行と名けて、自力諸善を修するの心とす、今道綽禪師は曇鸞大師を承け、九品の機類あれども、安心は同一の願作佛心・度衆生心の、他力信心なることを明さんと欲し、准通の造語を以て、溫和的に釋述したまふ、『觀經』の三福中の第三行福の發菩提心も、九品段の發無上道心も、顯說は自力假門の發心なれども、禪師は『論註』を承る故に、之を推功歸本して

大經云、凡欲往生淨土、要須發菩提心爲源

とのたまひ、此の菩提心を以て、上求菩提・下化衆生の普通の佛教々義に准じて、彌陀他力弘願眞實の別德を顯さんと思召すの趣き見ゆ、故に、此の菩提心釋の中、功用と名體と發心有異と問答解釋との四節あれども、其主たるものは、發心有異の一節に在り、初の二節は、之がための楷梯にして後の一節は餘論なり、此の發心有異の一節を解すれば、發菩提心の一章の全體は、おのづから領得せらるゝによりて、今此の一節に就て、集主の釋意を窺はん。

發心有異とある有異の文字を解するに、古來二說あり、一には、此の條二節ありて初に通相の菩提心に就て、自性淸淨の本體に識達すると、自利の萬行を圓修すると、利他の大悲を運度するとの、三種の修因の相は、これ卽ち發菩提心の眞相にして、普通佛教の

所談なり、又據淨土論已下は別途淨土の菩提心の、二利圓具の相を明したまふ、前の普通菩提心の三種の修因發心の相と別途の菩提心の願度の二心と、三又二の區別あるを有異といふと解し又他の一說には、普通佛敎と、別途淨土と、菩提心の名は同じけれども、其義は同一ならず、故に有異とのたまふといふ。今思ふに、後の說恐く禪師の意ならん、此の意により、有異の義をいへば、聖道淨土菩提心有異の義趣凡そ三あり。

一には、往生と成佛との目的の相異。聖道の菩提心は、菩提の大果を期するの心なるが故に、成佛を目的とす、淨土の菩提心は、往生淨土を目的とし、成佛の如きは、往生さへすれば、自然に卽する結果なり、實をいへば、淨土の安心は、願生心といふを至當の名とす、菩提心といふは、菩提卽ち佛果を期するの心なれば、淨土の安心を菩提心と呼ぶは、其具德を開示するの意味にして、行者の心相は、成佛を目的とするにあらず。

二には、心行通尾の異。聖道の菩提心は、三業の實修に依て成立す、故に、其心に佛果を期するも、三業に實現せずんば、菩提心は成ぜず、故に、善導大師の『序分義』に、三業にかけて、菩提心を釋したまひ、法然上人の『選擇集』に、菩提心の餘行とのたまふ所以なり、弘願他力の菩提心は、心に願行具足の名號を領するの一念に、願作佛心、度衆生心の、二利の功德圓滿し、速滿功德大寶海の身となりて、菩提心極成す、故に菩提心の名は、信心の異名にして、行名にあらず。

三には、聖道も上求菩提・下化衆生の二利を、菩提心の義とし、淨土も願作佛心・度衆生心の二利を、菩提心の義とす、二利は同じけれども、其趣は同じからず、聖道の菩提心は、實際に三業を以て二利を修成し、淨土弘願の二利は、同時具足法德門と二世順現往還門と、逆轉現行回向門との三義あり、此の義は宗祖聖人に至りて遺憾なく發揮せらる。一に同時具足法德門とは、獲信の當體、全領する所の名號は、法藏菩薩因位所修の二利の結晶なり、此の二利の行德、一念に圓具して、前もなく、後もなく、圓滿具足す、これを願作佛心の自利と、度衆生心の利他といふ。委くは、宗祖聖人の『二門偈』に、其意義を叙述したまへり。二に二世順現往還門とは、機上に現はるゝ心相に就ていへば、願作佛心の自利は、一心歸命の



願生心にして、聖人『和讃』に之を述て

一心に歸命するをこそ
盡十方の無碍光佛　願作佛心とのべ給へ

天親論主のみことには

とあり、此の願作佛心、順に轉じて往生の大果を得る、是を自利の究竟とし、卽ち利他の大悲を起して、十方に遊化し、穢國に還來して、度衆生心を實現す、故に、願作佛心の自利は、捨此往彼の往相にして、度衆生心の利他は、穢國に還來して、人天を度すと、善導大師ののたまへる是なり、大師は『觀經』上品下生の釋に

生諸佛境界、速滿菩薩大悲願行、還入生死、普度衆生、故名發菩提心也

とのたまふ是還相なり。三に逆轉現行回向門とは、彌陀佛より、

此の大信心を回向したまふ次第によりて、願作佛心・度衆生心の二利を解す、是は宗祖聖人已證の妙釋なり、此の願・度の二心を逆轉し、度衆生心を以て彌陀佛の大悲利他の心を呼び、此の大悲心の、衆生の心中に落在したる、一心歸命を願作佛心といふ、『和讃』に

願作佛の心はこれ　度衆生のこゝろなり
度衆生の心はこれ　利他眞實の信心なり
信心すなはち一心なり一心すなはち金剛心
金剛心は菩提心　此心すなはち他力なり

とのたまへり、宗祖聖人は利他の言を以て、行者の運心作業の名とせず、彌陀佛の大悲回向を顯すの稱としたまふ、これは『論註』の覈求其本の釋意より來る、聖人の特色發揮の文字なり、『本典』の行信等、衆生の自利に屬するものを呼ぶに

利他圓滿之大行　利他深廣之淨信

といひ、『二卷鈔』に至りて、利他を以て、他力の代名詞となす、此の邊の消息、尋常守文奴の知る所にあらず、此の集の菩提心釋の、理事相卽の眞俗二諦に約するの文字とは、其義關渉なきが如きも、有異の義を開展せば、勢此處に及ぶを以て聖人の菩提心に對する解釋を叙述せしのみ。

# 第十四章　九番の破會

## 第一節　總論

第二大門に三章あり、就中、第二章の破異見邪執は、破邪にして、第一章の菩提心と、第三章の廣施問答釋去疑情は、顯正なり、此の如く、破邪顯正して、遠く題號の安樂を闡明し、近くは、教興章の唯有淨土の義を布演し、第三大門の二門廢立の基を帳るなり、凡そ古來釋家の破邪顯正なるものは、皆當時教義弘傳の上に於て、必要ありて起れるものなれども、時移り世變するに隨ひて、對象の異端邪說の消長・起滅、新陳代謝同じからず、當時にありて、さしたる妨害にならざりしものも、後世其勢力を膨脹して、侮るべからざるものもあるべく、當時大妨害となりし異說も、後世衰滅して研究の價値さへもなくなりしものもあるべし故に古書を讀むものは、よく作者當時のありさまを想像し、心を其著者の地に置きて研究せざるべからず、溫故知新の効果は、此の一著子にあり、是史的一隻眼を、讀書人に要する所以なり。　此の集九番の破斥會通の中、彼大乘無相の計を以て、佛教の眞理と心得て有相を嫌ひ、願生淨土を以て、愛染卑近の妄見と貶し、又淨土を願生するも、猶是自心本具の性體を達見するの手段方便にすぎずと思ふ如きは、禪師の當時にありては、最勢力ありし淨土教義の妨害說なりしなるべく、又兜率願生十方隨願の往生說の如きは、今日にありては、かゝる往生思想を懷ける行人はなきも、禪師の時にありて

は、隨分勢力ありしものなるべし、今此の集に、異見邪執と指し、破會せるものを列擧せば

一　無相を以て、大乘佛敎の眞理なりと偏執せるもの。

二　願生淨土を以て愛染取相の纏縛なりと貶するもの。

三　願生淨土を是認するも、其淨土は自心と同體、願生は之を顯すの方便なりと思へるもの。

四　淨土を願生せんよりも、寧ろ長く穢土に留りて、衆生を救濟するを、大乘菩薩の本領とすと思ふもの。

五　淨土に往生せば、樂に耽りて道に進まずと考ふるもの。

六　願生淨土は、小乘敎の部類と思ふもの。

七　遠き西方淨土を願生せんよりも、近くして、娑婆に有緣なる、兜率天を願生するの勝れたるにしかずと思ふもの。

八　十方隨願往生を信ずるもの。

九　攝論宗の說を信じて、『觀經』の十念往生を別時意なりと思ふもの。

此の九番の異見邪執は、禪師の當時世上に流布して、淨土敎義と相容れざるものなりし故に、此の集勉めて之を闢きて、淨土往生の敎義を發揮したまへり、此の中初の三番は、理論的方面にして、當時の學者・識者の間に行はれしものにて、三番と分ちたまへども、要は、大乘無相を執する一に歸す、無相を以て、眞理なりと偏執するより、願生淨土を愛染取相とし、淨土を心所變の現象とするなり、後の六番は、實行的方面にして、廣く一般の佛敎界に現流せ

しもの、就中、兜率願生は、彌天の道安なども信ぜし所のもの、當時最廣く行れし思想の如し、今此の九番の中、要を取りて四節として之を辨述せん。

## 第二節　無相偏執に對するの破斥

無相偏執の見解は、其由來する所久くして、一朝一夕の因緣にあらず、元來佛敎の宇宙觀に、二途の說明ありて、一は宇宙の現象を否定する、諸法皆空の消極的法門と、一は萬象の差別を認容する、積極的法門とありて、之を空有の二とす、この空有は本來相卽相融して、單空にもあらず、單有にもあらず、されども、凡夫の所見は、差別に執じやすき病的心情を有するが故に、動もすれば、空に執して有を嫌ひ、有に着して空を排せんとする傾向あり、護法・淸辨・戒賢・智光・相繼いで那蘭陀寺に於て爭論せし事蹟を、彼の『西域記』載するを見ても知らる、然に、佛敎の支那に入り、漸く勢力を張大せんとするにあたりて、積極的有門の敎は歡迎せられずして、比較的消極の空敎傳播の勢を得たり、史を案ずるに、佛敎の支那に入りしは、後漢の明帝永平十年、迦葉摩騰・竺法蘭の『四十二章經』を譯するに始り、爾來大凡三百年間は、諸經の飜譯時代にして、菩薩の論釋は、譯出せらるゝことも少く、立敎開宗の事もなかりしなり。西晉の代、佛圖澄世に出て、道安慧遠を經て、姚秦の弘治三年、龜茲國の三藏、鳩摩羅什の來る頃となりて、始て諸部の論釋を譯し、大乘佛敎こゝに至りて、蔚然として興起し、立敎開宗の風致

をなす、然るに、支那當時の中流以上の人等は、彼竹林七賢人的の徒多くして、多くは清談放吟して、威儀・禮節を屑とせず、老莊虛無の說を悅んで、揚々得々たるは、大抵讀書人間のありさまなりし、此の老莊の說と、般若空無相の敎義と、相類似せる所あるより、思潮の赴く所に隨ひ、消極的空敎の世に歡迎せられしものなるべし、故に最初興りし宗旨は三論宗にして、彌天の時『般若經』研究の勢自然に此處に至りし歟、嘉祥の『中觀論疏』に

什師未至長安、本有三家義、一者釋道安、明本無義、謂無在萬化之前、空爲衆形之始、一切諸法、本性空寂、故云本無、

といふを以て見るも、三論宗の未だ起らざりし以前より、既に其興るべき地盤は作られたりしなり、此の機運延て隋・唐の交に至り、漸く實行的方面の佛敎に移らんとするにあたり、菩提流支の『淨土論』の飜譯成り、曇鸞大師の『論註』あらはれ、道綽禪師の此の集出るに至る、然れども、多年浸染せし空無相の偏執、容易に習味の脫却せざるものあり、是此の集破執の第一を、此の破無相に置きたまふ所以なり。

然るに、此に一の注意を要する事あり、三論宗の時めける趨勢により、曇鸞大師は、此の宗より轉向せし方にて、『論註』を見るも、『淨土論』の因緣假名の生を釋して、不一不異を明すが如き、淨土の境相を釋するに、無相卽相を主張したまふ如き、多少無相の偏執を破し、相無相々卽を以て、淨土敎を釋する、其趣三論敎義を應用したまふが如きも、往生淨土の因果を明すに至りては、彼三願的證

の釋の如く、專ら凡夫得生者の情謂に投じて、願生心を鼓吹し、又法界身の釋も、勉めて理觀を遮して、指方立相の信心を守護したまふ、此の『論註』の釋意を襲踏せる此の集なるが故に、願生の思想に、空・有相・無相等の心狀を論ぜず、相・無相は聖者の了達する所、凡夫は法德として之を闗具し、心相は唯願生のみなるを叙述したまふ、是に比對すれば、彼の廬山の慧遠系統の念佛が、如何に曇鸞大師系統の淨土敎に異るかを知るべし、慧遠の如きは、念佛を業とするも、猶是無相空觀を其理想とせり、延びて淨影・天台・嘉祥の徒に至りては、所觀の淨土をいふも、內心同體の法性の理法身を以て究竟とす、宋の宗曉の『樂邦文類』に、廬山の『念佛三昧詩序』を始とし、天台・慈恩・孤山・遵式・飛錫・等、三十二家の念佛の文を擧ぐ、



もし此の集の釋義を以て、此等の諸師に對望すれば、彼等は猶是無相偏執の習氣を脫せざるの趣あり、是此の集の破無相の條下に、破繫心外無法の一節を料簡したまふ所以なり、廬山『念佛三昧詩序』には

念佛三昧者、何思專想寂之、謂思專則志一不撓、想寂則氣虛神朗、氣虛則智恬其照、神朗則無幽不徹、斯一乃是自然之玄符、會一而致用、故今入斯定者、昧然忘知、卽所緣以成鑒冷、明則內照交映、而色象生焉

といひ、淨影は『觀經疏』に、是心作佛・是心是佛の文を釋して

一始學名、作終成名、是二現當分別、諸佛法身與己同體、現觀佛時、心中現者、卽是諸佛法身之體、名心是佛、望己當果、由觀生彼、名曰

心作佛」

といひ、天台は

今此觀經、以『心觀淨則佛土淨』爲『宗致』、

といひ。嘉祥は

心淨卽佛土淨、佛土者只由心、心垢故佛土垢、心淨故佛土淨、百萬品心故、有『百萬品淨土』、佛心第一淨故、佛土第一淨、故云『唯佛一人居淨土』也

といへり、此等の義脉、其系統を同じくして、聖道的なり、故に、此の集の破無相の一段は、此の廬山系及び淨影等の見解も、皆其所破となる。此の集觀佛を釋して、依正二報に過ぎずとのたまふは、彼等の觀察の空理に偏せるを斥し、又『論註』に依りて



法身無相故、則能無『不』相、是故相好莊嚴、卽是法身也

とのたまふ、一法句をいへども、空理に偏せず、無相卽相の義を述べて、所觀の境を理とするを嫌ひたまふ、直に偏取無相の頑見に墮するは勿論、たとひ相無相相卽をかたるも、相卽無相をかたりて、無相卽相を究竟とせざるものは、やはり今の所破とする、善導大師は

今此觀經等、唯指『方立』相、住『心而取』境、不『明』無相離念」也

とのたまへるは、更に一歩を進めて、淨土教の面目を發揮したまふ。禪師は聖道誘引の意趣を帶びて、溫和的造語をなしたまふ故

知『無相離念爲』體、緣中求『往者、多應』上輩生」也

とのたまひ、又

若攝緣從本卽是心外無法、若分二諦淨土無妨是心外法也。

隨順衆生、說有二諦。

佛法中有二諦、一者世諦、二者第一義諦、爲世諦故、說有衆生、爲第一義故、說衆生無所有。

とのたまふ、此等の文意を窺ふに、禪師の意、宇宙を大觀すれば、眞諦俗諦の二ありて、眞諦よりいへば、法界洞然一如の大海にして、我他彼此の差別相なし、故に無相といふべきも、俗諦の側よりいへば、森羅の萬　宛然として、因緣によりて現起する故に、佛あり、衆生あり、淨土あり、穢土あり、此の因緣差別の上に於る淨土教なるが故、無相を全ふしたる相に於て、願生西方の信行を論ずるなりといふを以て、此の集の大意とすること明なり言論は、善導大師の如く露骨にあらざれども、要するに、彌陀の全性修起の淨土は、二諦相卽・廣略相入にして、無相を卽したる相を以て、其敎體とすべきを明したまふ、無相偏見は勿論淨影・天台・嘉祥・等の義解にも、同じからざること知るべし。

## 第三節　穢土を願ふて淨土願生を欲せざるの執を破す

無相偏執に對する三番の料簡に續いて、第四番以下、實行的方面の妨害を破斥したまふ、此の中兜率願生と、十方隨願往生と、別時意說との三は、當時宗敎的信念の、實際に於ける偏執の大なる者、

又一部少數の人の間に行はれしものは、穢土再生を願ふて、淨土願生を嫌ふものと、淨土も亦耽樂の境と思へるものと、淨土敎も亦小乘敎なりと思へるものとの三類にして、是は其妨害の程度のやゝ小なるものなり、今講述の順序として、穢土を願ふて淨土を嫌ふ執見の礙斥より辨釋することゝせん、此の集の文に

此人亦有二一徒一

とのたまふより見れば、此の類の人は少數なりしを知るべく、もし又類を推して攝屬すれば、此の執見は、兜率願生と同じく、西方願生を嫌ふて、穢土生を望み、後佛に遇ふて、得脫せんといふの種類とも見らるゝなり、第五、第六の兩番も、淨土の耽樂は利他を缺くものとし、之を小敎乘ならずやと誤解するものなれば、是亦穢土生を望むものと同種といふべし、要するに、聖道門の偏執より此土入證を好み、長く穢土にありて、二利行を修し、後佛に逢ひて、記別を受くるを、理想とするより起るの偏見なり。唯兜率願生は、一旦慈尊の現在說法したまふ處に往き、其座下に參じて、五十六億七千萬歲を經過して、後慈尊と共に、再び此の界に下らんと思ふものと、今の穢土生を願ふは、長く此の界にありて、菩薩行を行じ、慈尊を待んとするものとの相違あるのみ、兜率天も猶三界を出でざれば、穢土に在るを望みて、淨土を願はざるは一なり、然るに、穢土生を望む思想は、隨分太古の時より、印度にも存在せしと見へて、『大論』三十八に

菩薩有二二種一、一爲二衆生一故願至二穢土一、二爲二集二功德一故至二一乘淸淨無

とあれば、淨土願生と、穢土願生との二類は、龍樹菩薩の時にも、既にあゝしものならん、今此の集に、一徒と指したまふものは、彼『續高僧傳』に載する所の、栖霞寺慧布禪師の如き徒ならん、其傳によりて見るに、大乘佛教の眞髓は、利他行にあれば、西方淨土に生じて、樂を極めんと期する如きは、菩薩の本領にあらずとなし、長く三界苦處に往來して、利他行を練修せんと志せる趣を述べたれば、强ちに、之を邪執といふべきに非るも、淨土願生の意義を領得せず、其教義の妨害となるを以て、今之を破斥して、淨土願生の眞意義を闡明したまふなり、『悲華經』に、大海梵士の志を、佛の嘉納したまひて、芬陀利と讃したまへることなどを思ひ合せば、長く



此土に留りて、衆生を濟度せんとの心がけは、殊勝といふべきも、唯其志を大にするのみにて、實力の之に伴ふものなければ、其所期却りて達せずして、自他共に苦海に沈淪せん、況や、淨土願生は、唯自利のみにあらず、底下の凡夫たりとも、よく弘誓の鎧を被て、普賢の德を行じ、自在に衆生を攝化する捷徑なるをや、是今禪師の料簡を用ひたまふ所以なり。

慧布禪師は、陳の禎明元年十一月、壽七十を以て入寂せし人なり、傳によりて見るに、學德一世に高く、徒衆を領すること多く、常に衆に告げて、

方土乃淨非吾願也、如今所願、化度衆生、如何在蓮華中、十刼受樂、未若三途處苦救濟也

といひ、其老困道を行ずること能はざるに至るも、猶

住世何益、常願生邊地無三寶處、爲作佛事去。

といひしとあり、西方願生の眞意を喫着ぜず、徒らに迂路を辿りしは憐むべきも、その勇猛の精神に至りては、大に諒とすべき所あり。思ふに、此の慧布禪師の入寂の時、道綽禪師は年甫めて二十六歳後玄忠寺に入りて、淨土の業を修めたまふ時、慧布の遺弟等の、其遺訓を承襲し、綽師の西方願生の化風を妨ぐるものありしならん。

然るに、此の慧布禪師の臨終に就て、『樂邦文類』に靈芝の『淨業禮懺儀』の序を引きて

慧布法師云方土雖淨非吾所願、何如三途極苦處救衆生也、由是、堅持所見、歷涉歲華、於淨土門略無歸向、見修淨業、復生輕謗、後遭重病、色力痿羸、神識迷茫、莫知趣向、既而病差、頓覺前非、悲泣感傷、深自克責志雖洪大無堪任。

といへり、此の說によれば、慧布は後に悔悟して、淨土念佛の門に入りしやうなれども、傳には此の事を載せざるのみならず

將逝告衆云、昨夜二菩薩見迎吾、既許之、尋有諸天又來迎接、以不願生故、不許耳言已、端坐而化、時有見鬼者、有望見旛花滿寺光明騰熾者、不測其故、入寺視之、乃布公去世

と記せり、二菩薩とは、生身と法身との二菩薩なり、是によりて見れば、苦界利生の素志を遂行せしものゝ如し、古來の宗學者は、多く『樂邦文類』によりて、慧布の懺悔歸淨を述ぶるも、かゝる事は、

其いづれか眞なるか、今日にては、確實に知るに由なし、されども、慧布は、その意志を枉げずして逝き、遺徒猶在りて、道綽禪師の西方願生の化風を妨るを以て、之が破斥を加へたまふと見る方、却て、史實を得るに庶幾きやに思はる。

禪師の此の集に於ける、穢土願生に對する破斥は、天台の『十疑論』の所明と、頗る相似たり、『十疑論』に

問曰、諸佛菩薩、以大悲爲業、若欲救度衆生、只應願生三界、於五濁三途中、救苦衆生、因何求生淨土、自安其身、捨離衆生、則是無大慈悲、專爲自利、障菩薩道、答曰、菩薩有二種、一者久修行菩薩道、得無生忍者、實當所責、二者未得無生忍、已還及初發心凡夫菩薩者、要須常不離佛

といへり、今禪師の不退の菩薩と、而下の凡夫とを分ち、不退以上の菩薩なれば、誠に慧布等の素望の如く、苦海利生を遂行し得べきも、濁惡の凡夫は、染に處して染まず、惡に逢ふて變ぜず、鵝鴨の水に入りて、游泳自在なるが如きこと能はず、此等は難を逼りて、水に投ぜしが如きのみとのたまふ、其意聖道門不退以上の菩薩は、慧布のいふが如く、穢土を願生しィ、西方願生せざるも可なりと、許したまふことゝなりて、『十疑論』以上に、別途の法味の存せざることゝなる、老生此の集一部の文意を翫味するに、禪師の所謂不退の菩薩とは、『十疑論』に、得忍の菩薩といふが如き、常途聖道の菩薩にあらずして、是正しく二十二願所誓の、補處の菩薩を指したまふものと思はる、禪師の釋意を尋るに、淨土に往生する

ものは、速かに不退以上の菩薩相を示現し、娑婆に還來して、自在攝化の事に從ふ、還相利猛の事を示したまふならん、此の集今の引文と、下第八大門作往生意の文とを合せ見るときは、其意了然たり、今の文に

若身居不退已去、乃至如鵝鴨入水々不能濕、如此人等、堪能處濁拔苦、若實凡夫者、唯恐自行未立、逢苦卽變、欲濟彼者相、與俱沒、如似逼難入水、豈能不濕

とのたまひ、第八大門の文には

譬如二人、俱見父母眷屬沒在深淵、一人直往、盡力救之、力所不及、相與俱沒、一人遙走趣一舟船、乘來濟接、並得出難、菩薩亦爾、若未發心時、生死流轉、與衆生無別、但已發菩提心時、先願往生淨土、取大悲船、乘無碍辯生、入生死海、濟運衆生

とのたまふ、鵝鴨入水の文と、趣船來濟の文と、『大論』は同一處にあるを、今之を二處に分引して、彌陀願力によりて、始てよく苦界利生の目的を達することを顯したまふ、此土入聖、自力聖道の法によりて、敢て自ら揣らず、大志を起して、三界にありて、衆生を救はんと志すとも、自德未立にして、到底其所志を果遂せず、却て自他俱に生死海の沈沒を免れざるべし、之を逼難入水に喩へ、之に反して、名號不可思議の力により、淨土に往生せば、よく妙果を究竟して、大悲の船に乘じて、生死海に逍遙し、修普賢德の化益をなすこと、恰も、鵝鴨の水に入りて、溺沒せざるに等しく、舟船に乘じ來りて、溺者を救ふの容易なるが如しといふ禪師の釋意ならん

と窺ふ。己下第五・第六の二番の破斥は知りやすきが故に、略省し第七第八の二番を併せて講述せん。

## 第四節　兜率・十方の願生に對する破斥

九番破會の内、第七番は兜率願生に對し、第八番は十方隨願往他に對したまふ、此の二番の中兜率願生は他土往生より起る思想なれども、其終極の目的は、龍華三會の曉に、慈尊と共に再下して、成佛の記別を得んといふにあれば、猶是此土入聖の聖道門に同致す、十方隨願往生に至りては、大に其趣を異にし、一往文字的解釋にては之を往生淨土門に攝屬するも、不可なきが如し、故に法然上人は、俊乘房の問に答へて

聖道門に大小あり、權實あり、淨土門に十方あり、西方あり、西方の門に雜行あり、正行あり、正行に助行あり、正定業あり、かくして聖道はかたし、淨土はやすしと、釋しいるゝなり

とのたまふ、然れども法義を以て、嚴格に解釋すれば、十方隨願往生は、往生淨土といへども、其果報は、猶自心變の域を脫せざるが故に、『仁王經』の

三賢十聖住果報、唯佛一人居淨土

なるものと、其終歸を同ふして、やはり聖道門の攝となる故に、此の集此等の他土往生敎の西方往生と、似而非なるものとを擧て、之を簡去したまふ法然上人と雖嚴格に法義を仕分けたまふときは、十方隨願往生を以て、淨土門に攝屬したまはざること彼の

『選擇集』の建立淨土の章と、特留念佛章との、四重住滅の釋とを査對して翫味せば明白なり、要するに、九番の破斥會は概して往生淨土の一門に對せる妨害を、攘ひたまふものにして、厚薄淺深の差別ありといへども、其所破會の法門は通じて聖道綽思想の變化消長にすぎず、兜率願生の法門は源佛說より出づ、大藏中左の數種の經あり

佛說彌勒所問本願經　西晉三藏竺法護譯
佛說彌勒下生經　後秦龜茲國鳩摩羅什譯
佛說彌勒大成佛經　同人譯
佛說彌勒下生成佛經　唐三藏法師義淨譯
佛說彌勒上生兜率天經　宋居士沮渠京聲譯
佛說彌勒來時經　失譯人名

又『佛說大乘本生心地觀經』八卷十三品ありて、其中第三の「報恩品」と、第九の「功德莊嚴品」とに、上生兜率天のことを說けり、「功德莊嚴品」には

爾時世尊、說如是等菩薩行已、告彌勒菩薩摩訶薩言、善男子我涅槃後五百歲、法欲滅時、無量衆生、厭離世間、渴仰如來、發阿耨多羅三藐三菩提心、入阿蘭若、爲無上道、多習如是菩薩行、於大菩提、得不退轉、如是發心無量衆生命終上生覩史天宮、得見汝身無邊福智之所莊嚴、超越生死證不退轉、於當來世大寶龍華菩提樹下、得阿耨多羅三藐三菩提

と說き、又菩提流支の譯せる『彌勒所問經論』九卷あり、此の外『華

嚴經』等の諸經の中に、上生兜率・下生成佛などの事を說けるもの數多し、支那に於て、古昔兜率願生の思想の發達せる時代思潮の要求によりて、之に關する經論の多數飜譯を出せしものならん。如何なる年代に、この兜率願生の思想の發生しせかは確知しがたきも、竺法護の『本願經』を譯せし頃より、發生せしものなるべく、史傳によれば彌天の道安の彌勒を信じ、兜率を願生せしことを記す、竺法護は晉武の末を以て深山に隱居し晉惠の西奔によりて、亂を避けて溫地に下り、春秋七十八を以て寂すと、傳にいへるより見れば道安に先つこと七・八十年竺叔蘭白法祖支・法度・法立・法炬・佛圖澄等を歷て、道安に至りしものなれば、此等の譯經の人々の中にも兜率願生の人ありしやも知るべからず、兎も角も兜率願生の思想は西晉の頃より、支那宗教界に勃興せしものとすれば西方願生と共に由來久しき歷史を有せる信仰といふべし。

然るに此の兜率願生と、西方願生とは其理想似て非なるを以て、相排撥して同化せず甲乙互に主張を抗爭せしこと、一朝一夕にあらず禪師に先ち、天台は『十疑論』の第七疑に、具さに辨明して、西方願生の兜率願生に勝るゝ所以を比較し、六條を列ねたり、左の如し。

一兜率上生は、經說によるに行衆三昧、深入正定始得生といふ、彌陀の如き本願光明の力攝取引接すとのたまふ經文なし。

二兜率天宮は、欲界なれば彌陀の淨土の如く、水鳥樹林風聲樂

音の聞者をして皆菩提心を發し、煩惱を伏滅せしむることなし。

三、兜率天宮は、女人ありて、五欲に愛着す、彌陀の淨土は、女人二乘の心なき、純一大乘善根界なり。

四、彌勒の會下には、見佛空過のものありて、恰も舍衛國九億の人、其大半釋尊を信ぜざるが如きものあれども、彌陀淨土の衆生は、一人も空過退沒することなし。

五、天中の年月、頗る長くして、上生より下生に至るまで、迂回を免れず、彌陀の淨土は、不退增進成佛に至ること速疾なり。

六、師子覺、既に上生して、五欲に耽りて、慈尊の許を離れたりといふ、彌陀淨土に往生するものは、かゝることなし。



以上『十疑論』の所明と此の集とを比對し見るに、別に特異と認むべき點はなきやうなれども、天台と禪師と、其根本意思に於て、既に相違する所あるが故に、よく考察するときは、聖道と淨土との、理想の異點を見るべし、今禪師の料簡を見るに、初に

彌勒世尊、爲其天衆、轉不退轉、聞法生信者獲益名爲信同、

とのたまひて、姑らく相似たるものを許し、後に四種の勝劣を擧げたまふ、四種とは

一、兜率は、信を生ずるもの少くして、退沒するもの多し、是其境界猶三界の攝なるが故なり、彌陀の淨土は一生補處の菩薩のみ。

二、兜率天宮は、たとひ半途退沒せざるものといへども四千歲

の後は、退沒を免れがたし、彌陀淨土の衆生は、佛と同じく無量壽なり。

三、兜率天宮の水鳥樹林は、樂の五欲に順じて、聖道を資けず、西方淨土の鳥聲樹音は、よく衆生に悟解を生ぜしむ。

四、唯音樂の一種に就ていふも、兜率天宮の音樂は、彌陀淨土の如く、轉展相勝百千萬倍最勝の德なし。

此の四別は、『十疑論』と、別に異るものなきに似たれども、壽命與佛齊とのたまふ處に、生佛不二の壽德を顯し、音樂に寄せて、超踰十方の義を示したまふ、此等は天台大師の思想になき別途不共の法門を示したまふ、禪師の後懷感・迦才・慈恩・玄奘宗曉・元照・等の諸師皆此の兜率と西方との願生に就て、比較顯勝の釋をなし、淨土教を讃嘆せるに、禪師の資たる善導大師は、其具釋を見ず、されども人天の樂を貶して、淨土を勸めたまふ處、自ら其意の存するものあり、『定善義』に

諸佛出世、種々方便、勸化衆生者、不欲直令制惡修福受人天樂也。人天之樂、猶如電光、須更卽捨、還入三惡、長時受苦、爲此因緣、但勸卽令求生淨土、向無上菩提

とのたまふを見て知るべし、我邦にても、古昔南都に知足院のありしを見ても、兜率願生の思想ありて、西方願生と並び行はれしことを知る、源信僧都の『往生要集』、法然上人の『選擇集』にも、此の料簡あり、方今幸に西方願生の人のみありて、兜率・十方・等の願生者なゝ、其妨害の說なきは、喜ぶべきことなり。

次に、十方隨願往生に對する此の集の破立を窺ん、『十方隨願往生經』は、『佛說大灌頂神呪經』中の「普廣品」を別行流布せしもの、『寶積經』中より『如來會』を別行するの類なり、『大灌頂神呪經』は十二卷ありて、晉の帛尸梨密多羅の譯「普廣品」は第十一卷にありて、佛が普廣菩薩を對手として、十方淨土の往生を勸めたまふことを說けり、此の「普廣品」を『十方隨願往生經』と名けて、別行せしは、いづれの世なりしかは知るに由なし、『十疑論』第三第四の疑問、此の十方隨願往生を以て、偏念西方を難し、其答に、偏取一境專念一佛は、一相三昧にして、其德一切佛に歸するの義あると、佛說多勸在西方慇懃指授の指南による、との理由を以て、頗る辯明に勉めたるを見るゝ、當時此の隨願往生の見解に住して、西方願生を輕視するものありしことを知る、又此の集第四大門第一章に、曇鸞大師の事蹟を述べて

曇鸞法師、康存之日、常修淨土、亦每有世俗君子、來訶法師曰、十方佛國、皆爲淨土、師何乃獨意注西、豈非偏見生也

とあり、是蓋し當時の帝王等が、十方隨願往生の義によりて、大師の偏取西方の信念を難ぜしものならん、故に、大師の答に、地上菩薩の如き、自在觀念に至らざる凡夫たる我等、汎然十方を均念すること能はざれば、一境を選びて、專志念佛するとのたまふ、此の專念一境のことは、『隨願往生經』に、既に其說あり、文に

普廣菩薩摩訶薩、又白佛言、世尊、十方佛刹、淨妙國土、有差別不、佛言、普廣無差別也、普廣又白佛言、世尊、何故經中、讃嘆阿彌陀佛刹、

七寶諸樹・宮殿・樓閣諸願生者、皆悉隨彼心中所願、應念而至、佛言、普廣、汝不解我意、娑婆世界人、多貪濁信向者少、習邪者多不信正法、不能專一心亂無志、實無差別、令諸衆生專心有在、是故讃嘆彼國土耳、諸往生者、悉隨彼願無不獲果

とあり、然れども、此の說の如くなれば、實は十方淨土、何れも、皆差別なけれども、衆生をして專志ならしめんがために、西方を取り、彌陀を勸む、偏念西方は、猶是爲人悉檀にして、第一義悉檀は、十方隨願にありといふ意となる、又唯專志の爲の偏取一方なれば、必ずしも西方にかぎらず、東・西・南・北いづれの一方を取るも可なりといふ義に歸す、是天台の勉て諸經多勸在彌陀の義を述べて、西方願生を辯明せし所以なり、今此の集、この九番破會の章と、第六



大門の第一章との兩處に於て、十方隨願往生を排して、西方願生の勝れたる所以を述べたまふ。此の兩處の釋意を對照して、禪師の眞意を窺へば、其義趣おのづから明白となる、唯此の九番料簡の條下のみを見れば、天台の釋意と格別の殊異なし、先此の九番破會の條下に、三番の理由を以て、十方隨願往生と、西方願生との優劣を辯じたまふ、其三番とは

一、專志有在、『十方隨願往生經』の文意に依る。

二、淨土の初門、『華嚴經』「壽量品」の文意に依る。

三、境次相接、『止法念經』の意に依る。

此の中第二と第三とは、姑く二と分つといへども、畢竟穢土の末處と、淨土の初門と相依りて

往生甚便、何不去也

の一義を成ず、此の淨土の初門といへることは、『華嚴經』によれば、娑婆世界・安樂世界・聖服幢世界・不退轉音聲輪世界・離垢世界・善燈世界・善光明世界・超出世界・莊嚴慧世界・鏡光明世界・勝蓮華世界の娑婆及び十佛刹を並べ、次第に一劫を以て、一日一夜とすると說き、各其世界に住する佛をあげ終り、第十勝蓮華世界の佛を賢首と名け、普賢等の諸大菩薩、其下に充滿せりと說く、一往の所見にては、彌陀佛刹は、十一刹土の最初にありて、淺劣に位するが如く、十方佛刹に超過すといへる說に相違し、又境次相接といへることも、娑婆は穢土最終處にして、淨土の最初たる安樂世界と隣接すといはゞ、過十萬億佛土、有世界、名曰極樂とのたまふ經說と



矛盾するが如し、於是第六大門の料簡と對映して、仔細に翫味し、今は易といふ邊を顯すを主とし、第六大門の第一章は、勝といふ邊をあらはすを主とし、相對し、相映して、易をいふも、勝を離れず、勝といふも、易を全ふし、易にして勝たる義おのづから會得せらる、第六大門の第一章、十方・西方の比較顯勝にも、亦三番の料簡ありて、釋迦佛の偏嘆西方したまふの理由を述べたまふ、之を左に列擧せば

一、彌陀・觀音勢至の三尊は、皆曾て此の界にありて修行したまひ、此の界の衆生と因緣深し、是釋迦佛の十方淨土の中に、殊に、西方を選んで勸歸慇懃なる所以なり。『悲華經』

二、彌陀佛の因位に於て、二百一十億の諸佛土中より、善惡粗妙

を選擇し、具さに弘願を發し、其願力より成就したまひたる淨土なれば、釋迦佛慇懃に勸歸したまふ。『無量壽經』

三、韋提希夫人、釋迦佛の光臺中に現じたまひたる十方淨土を觀見せるに、他の諸佛土も皆光明あれども、西方淨土は、特に勝れたりとて、我今樂生、極樂世界、阿彌陀佛所と、選擇願生す、是十方淨土よりも、彌陀淨土の超過せる故にて、釋迦佛の偏嘆したまふも、之によると示したまふ。『觀無量壽經』

此の如く、『悲華經』、『無量壽經』、『觀無量壽經』の三經によりて、十方より西方の勝るゝことを顯し、結文に至りて

故知、諸佛淨土中、安樂世界最勝也

とのたまへり、此の破會の條下と、第六大門の第一章と相對相照して、前は易の義を知らしめ、後は勝の義を知らしめ、相依りて彌陀佛の淨土に、勝易の二德を具備することを示したまふ、かく意を得て見れば、佛境界は初後不二なれば、『華嚴經』「壽量品」の引證は、時劫の長短を以て、後々益勝の義を示さんが爲に、彌陀淨土の初門最劣をいふにあらずして、唯是往生甚便の、易の義を示さんための引證なり、故に、最後第十佛刹にある普賢菩薩は、同『華嚴經』にありて

願我臨欲命終時　盡除一切諸障碍
面見彼佛阿彌陀　卽得往生安樂刹

と、西方願生の意を述べられたり、最勝の勝蓮華世界、賢首佛刹にある普賢菩薩、かへりて最劣の安樂佛刹の彌陀を、見たてまつら

んと願生する道理あるべからず、然れば、文に優劣相望とあれば
とて、必ずしも、土體の勝劣をいふにあらず、唯是年時の長短を擧
げて、易の義を示せるのみ、佛土本來不可思議にして、初後・方所・年
月等、みな機に隨ふて說く、其土體は不二絕對なり、初後・年月・遠近・
長短は、機に應じてあらはる、此の集に

十方淨土、雖皆是淨、而深淺難知

とのたまふもの、措辭切迫ならずといへども、其意は十方は淺に
して、西方は深なりとするを、禪師の意とすること、前後の文字相
望して推知せらる、然れば、此の破會の條下は、勝を全ふずる易を
あらはすを所詮としたまふ、故に、綾漫の言辭をなし、第六大門に
至りて、易を全ふしたる勝をあらはして、超諸佛刹最爲精の義を

のたまふ、『口傳鈔』に

凡夫の報土にいることをば、諸宗許さるゝ所なり、然るに、淨土
眞宗に於て、善導家の御こゝろ、安養淨土をば、報佛報土と定め、
至る所の機をば、さかりに凡夫と談ず、このこと性相の耳を驚
かすことなり云々

とのたまふ、凡夫往生は易の義にして、隨機顯現の境界、在西示現
小の安樂淨土なり、聖服幢世界以後は、諸佛淨土にして、凡夫の往
生する所にあらず、もし勝の義よりいへば、安樂世界は眞實報土
にして、既に窮理の聖となりて、眞に遍空の威あるもの、是安樂世
界の超世たる所以なり。

境次相接とのたまふに就て、古來の宗學者、或は國界相接なりと

いひ、或は果報相接なりといふ、今上來の如く解し來れば、示現の淨土、凡夫往生の爲なれば、凡夫の境界は、淨土に至るの入路なり、故に、果報の隣接するものといふべし、淨土に凡夫の機に、相應・不相應あるが如く、穢土にも亦安樂世界に往生するに、相應・不相應あり、穢土の始處を斯訶世界といふ、此の境界は土田沙石人皆樹皮を以て衣とす、又一世界の如きは、虎狼蛇蝎迭に相噉む、かゝる境遇に在りては、淨土往生の緣遠く、彌陀佛の本願を聞受するに至便至利ならず、是不相應の果報といふべし、然るに、娑婆世界は、穢土の末處、賢聖同流の境界なり、西方淨土に入るの門戸なり、故に、往生甚便利なり、是穢土の果報の、淨土に相應するものにあらずや、淨土の初門と、穢土の末處と、相接すといふは、境遇果報の接近するをいふ。古來の學者、依報に約すれば、土界相接、正報に約すれば、果報相接といふ、今思ふに、依正二報卽果報なり、豈其一を偏取せんや、又古來須彌山佛國を過るの異譯の大經の文に依り、或は『梵網經』の一華百億、釋迦佛化境の說に依り、土界相接の義を成立せんとするものあり、煩鑽穿鑿、却りて禪師の釋意を失ふ、淨土の初門、穢土の末處、相依りて爲凡敎義の眞義をあらはしたまふ、其旨深し。

## 第五節　別時意に對する會通

別時意とは、『攝大乘論』を所依とする攝論主の人、其論に明せる四意の中の別時意語といふを以て、『觀無量壽經』の下々品に、十

念の念佛を以て、西方淨土に卽得往生すと說ける經文に擬して、佛の意許は、僅々十念の實際に、卽得往生の果を得るの理なきことを知りたまへども、懈怠の凡夫を勵まして、永遠隔生の後、佛所に到るべき結緣たらしめんが爲に、方便して卽得往生の言語をなしたまふものなりといふ、此の攝論宗徒の說、世の中に弘りて、念佛に志をかくる人をして、念佛往生の敎が、第一義悉檀にあらざるかの疑慮を生ぜしめ、念佛弘通の妨害となる故に、今淨土門正系統たる道綽禪師・善導大師の、勉めて之を破會したまふのみならず、淨土門の傍系統なる支那隋唐の代に於ける、天台・懷感・迦才・慈恩等の諸師も、皆之が破會を試み居れり、以て當時彌陀念佛の妨害說の中、其侮りがたき勢力のありしことを推知し得、然る



に、禪師の筆鋒は、淨影等の諸師に抗するを避け、穩和に『涅槃經』に依り、宿因多積の理由を以て、之を會通したまふ、善導大師に至りては、頗る嚴峻なる毫鋒を以て、願行具足の義を以て、破會したまへり、是其對する所の、時機の然らしむるもの歟。

此の會通に就て、先づ『攝大乘論』のことを一言せんに、無着菩薩が『阿毘達摩經』の「攝大乘品」によりて、『攝大乘論』を造り、天親・無性の二論師が、之が釋論を造りしは、佛滅後凡九百年の頃なりき、爾後五百餘年を經て、支那元魏の普泰元年に、佛陀扇多三藏始めて無着菩薩の本論を譯出せしより、唐の玄奘三藏が、天親・無性の釋論を譯出するまで、凡そ四代の飜譯あり、就中、眞諦三藏の譯せるものを、梁論と稱して、眞諦三藏の弟子智愷・慧曠・法常・智儼等、相續で

盛んに之を講敷せしを以て、この梁論最も世の中に歡迎せられ、
攝論宗を形づくるに至れり、故に禪師・善導大師の破會も、此の梁
論に就て、破會をなしたまふ、其四譯を列擧せば

一、攝大乘論二卷

元魏普泰元年佛陀扇多三藏譯

曇鸞大師の入滅に先つこと十二年

二、攝大乘論三卷　天親釋論十五卷

陳の天嘉四年眞諦三藏譯

此の論は陳代の譯なるが、梁論と稱するは、眞諦三藏は、梁
の代に來れるが故ならんと、顯意の『楷定記』にいへり。
天嘉四年は禪師誕生の翌年なり



三、天親の釋論十卷

隋の達摩笈多三藏譯

四、天親釋論十卷　無性釋論十卷

唐の玄奘三藏譯

此の四譯の中、魏譯は上卷四十に、四種意趣と、四種密語をあげ、梁譯
は本論中八ヶに、釋論は卷十七十三に、四意・四依を擧げ、隋譯は卷五に、
四意・四合章あり、唐譯は天親釋論の第五、無性釋論の第五に、四種
意・四秘密をあぐ。
以上四譯の中今此の集の所對は梁譯なれば、その釋論の文を左
に鈔出せば

論曰、復次有二四意四依一、一切佛世尊教、應二隨決了一、釋曰、如來所說正

法、不レ出二四意四依一、此意及依由二三性一、故可二決了一、若離二三性一、無二別道理一、能決二了此法一。論曰、二別時意、釋曰、若有二衆生一、由二懶惰障一、不二樂勤修一行、以二方便一說、由二此道理一、於二如來正法中一、能勤修行、方便說者、論曰、譬如二有說一、若人誦二持多寶佛名一、決定於二無上菩提一、不二更退墮一、釋曰、是懶惰善根、以レ誦二持多寶佛名一、爲レ進二上品功德一、佛意爲レ顯二上品功德於淺行中一、欲レ令二捨二懶惰一、勤修道一、不レ由二唯誦二佛名一、卽不二退墮一、決定得二無上菩提一、譬如二由一金錢一、營覓得二千金錢一、非二一日得一千一、由二別時得一千一、如來意亦爾、此一金錢、爲二千金錢因一、誦二持佛名一、亦爾、爲レ不二退墮菩提因一、論曰、復有說言、由二唯發願一、於二安樂佛土一、得二往彼受一生一、釋曰、如レ前應レ知、是名二別時意一

とあり、四依とは、令入依と、相依と、對治依と、黐依となり。是は今の要にあらざれば、引文も講述も略して擧辯せず。

釋論の文によれば、金錢の譬は、多寶稱名の下にあれども、次の發願得生の別時意の下に、如前應知といへるを以て、禪師も善導大師も、往生別時意に就て、彼の所立を述る下に、此の譬を擧げたまふ、論文釋文を一督すれば、攝論宗の人のいふが如く、如何にも、安樂世界の往生を、十念々佛を以て卽得すといふは、佛の別時意語の如く見ゆ、故に古來の學者、種々の義門を立てゝ、之が會通をなせり、其爭論の燒點となる問題を擧ぐれば、大略三種となる。

一、天親『釋論』に、所謂安樂淨土の、唯願別時意とは、果して『觀經』所說の十念往生を指す歟。

二、『淨土論』を造りて、一心願生、速得菩提を主張したまひし天

親菩薩、何故に、攝論を釋して、往生安樂の別時意方便を說くや。

三、禪師は多積宿因を以て『觀經』の十念の別時意に非ざることを述べ、經論相符を說く、其意宿善を有せざる十念は、別時意なりとして、『觀經』に此の義を存せるか、

今此等の疑義を解說する前に、天台の『十疑論』の第八疑の條下に述べたる別時意會通を、參照のため擧示して、後此の集の解釋に入ることゝせん。

『十疑論』に臨終十念の猛利作用を明し、其終りに

上古相傳、判十念成就、作別時意者、此定不可、何以得知、攝論云、唯由發願故、全無有行、雜集論云、若願生安樂國土、卽得往生、若人聞無垢佛名、卽得阿耨菩提者、並是別時之因、全無有行、若將臨終無間十念猛利善行、是別時意者、幾許誤哉、願諸行者深思此理、自牢其心、莫信異見、自陷墜也

といへり、是は攝論宗徒の對『觀經』の見解の誤れる點を指示し、彼が十念々佛は、唯是十聲にして止む程の淺行にして、遂行繼續の力なければ、行といふ價値なきものとして、唯願別時意なりとするを破し、縱令十聲といへども、此の十念は臨終無間無後の心に住して稱する、猛利の十念なれば、其勢力甚だ强く、死して卽ち往生す、然らば、願行具足にして、唯願別時意にあらず『雜集論』に無垢佛名を擧るが如きをこそ別時意といふべけれと會通するなり。

此の『十疑論』に引く所の『雜集論』は、安慧菩薩の造にして、唐代の譯出なり、又此の『十疑論』に、玄奘三藏の著述せる『西域記』をも引けるを以て、古來『十疑論』は、天台の眞撰にあらずといふ說あれども、此等の詮議は、今の要にあらざれば、略することゝし、天台は隋の開皇十七年を以て入寂せし人なれば、禪師の此の集撰述に先ちて、既に別時意會通をなせし人として、其著『十疑論』を擧げしなり、此の『十疑論』と、此の集とを對照するに、其會通の論據を異にするもの、其意なくんばあるべからず、禪師も『大智度論』や『論註』を承けて、臨命終時の心力猛利のことをのたまへども、之を以て、別時意會通の論據とはなしたまはず、是禪師の意弘願念佛は、臨終平生を問はず、別時意にあらざることを釋明せんと欲したまふが故ならん、善導大師の如き、願行具足を以て會通したまへども、其具足の力は、法體六字にありて、能稱の勢力猛利を以て、義據とはしたまはず、禪師の會通は、宿善を以て義基論據とし、大師とは異る所あれども、此の集一部を通觀すれば、第十八願意を述べて

十方人天、欲生我國者、莫不皆以阿彌陀如來大願業力爲增上緣也

とのたまひ、廣施問答釋去疑情の條下に、『論註』に依りて、名號力を以て、念々罪滅、卽得往生する旨をのたまふの處、全く善導大師と一致して、弘願他力の稱名は、法體に萬德を圓具し、平生臨終を問はず、別時意にあらざる義を成ずること明白なり、然れば、『十疑

論』の會通は、猶是聖道門的臭味を帶るものといふべし。

總して、觀經下々品の十念々佛を、臨終猛利の心なるが故に、勢力强盛なりとするは、眞宗純弘願他力の敎義にあらず、純他力の宗意は、平生と臨終とを問はず、念佛の功力强盛なるは、全く法體名號の力の顯現と見るを、正しき領解とする故に、『論註』此の集共に臨終無間・無後の心力をのたまへども、是は『觀經』の文相により、臨終に寄せて、名號力を顯したまふものにて、義は平生にも通ず、此の事は、廣施問答・釋去疑情の章中、三在釋義の條に至りて辯述せん、今此の九番の破會前の兜率願生又十方隨願往生、皆其義勢、天台の『十疑論』と酷似せるにも拘らず、此の別時意會通の一節は、全く其論據を異にしたまふ處、純粹弘願他力の念佛義を顯したまふ禪師の眞意を掬すべきなり。

却說、前に揭げたる三疑問を、以下次第を追ふて辯述せん、先初に無着菩薩の『攝大乘論』、天親菩薩の『釋論』にのたまふ安樂世界に對する唯願別時意とは、『觀經』下々品の、十念々佛を指示せるものなりやといふに、結局是は『觀經』又は大・小・二經をも指すにあらず、迦才の『淨土論』には唯願別時意は、小經の發願得生を指すならんといひ、顯意の『楷定記』には、三義を擧げ、一には、小經の三發願を指す、二には、他經の無量壽佛のことを說きたまふ文を指す、三には『觀經』は了義の說にして、別時意にあらざるも、懶惰の機に應ずる義邊を取りて別時意として指示したまふといへり、此の三義の中、今は第二義と同意にて、他經の西方往生を說ける

別時意語なるものを指すとするなり、たとひ魏譯の『攝論』に
如『無量壽經』說、若有『衆生』願『取無量壽世界』、卽生爾
と經名を擧げたるも、是亦大・觀・小の三經を指すにあらず『論註』
に、業道を說ける經文を擧るに、業道經といひ、『法事讃』に『觀佛三
昧經』の地獄の苦相を說きたまふ文を擧るに、地獄經とのたまへ
るが如く、今も他經の中に遠生の結緣たる別時意的彌陀念佛を
說きたまへるものを指して、無量壽經とのたまふ、況んや『梁論』
は經名を擧げざるをや、或人禪師の意、無宿善の人にして、十念々
佛を修せば、おのづから別時意を成ず『觀經』此の義を存するが
故に『攝論』は『觀經』を指すといふも、妨なしといへり、此の說『楷
定記』の第三義に似たるもの、一理なきにあらざる如きも、『觀經』



の十念に別時意の義を含ませるといふは、此の集の釋意にあら
ず、又或人は、『觀經』には隱顯あり、顯說には一往別時意の義を帶
びて、卽得往生にあらず、『攝論』に『觀經』を指して、別時意とせし
は、此の義邊ならんといへり、然れども、定散諸行を修して、往生す
る顯說豈唯願別時意ならんや、たとひ、化土の往生たりとも、『攝
論』に所謂遠生結緣の別時意に同じからず、又或人は、他譯になき
より見れば、魏論の無量壽經は、譯者の誤ならんと、是亦想像のみ、
確乎たる文理の證なし、要するに、此の集に『觀經』には、過去の有
因無因を論ぜずとのたまへども『觀經』に無宿因の十念ありて、
別時意を成ずいふにはあらず、隱始顯終・沒因談果にして、明に文
に見へざる故に、不論とのたまふ論の意は『觀經』に過去の因を

閉るに乘じ、其因を開示して、別時意とするといふを經論相符の義とするなり、此の集の

若望論主、乘閉過去因、理亦無爽

とのたまへるを解して、無着菩薩が『觀經』に過去の因を隱閉せるに乘じて、この說相に別時意を帶るが故に、魏譯には如無量壽經といへるなりと解する如きは、恐く經意にあらざるべし、無着菩薩は、過去の因を閉ぢたる經說によりて、其閉ぢ隱れたる所の宿因を開示して、別時意をのたまふといふ意と、解すべきなり、然れば、論の指したるものは、我が淨土の三經にあらず、恐くは、他經所說の彌陀念佛を指すなるべし、彼攝論宗徒の之を以て、『觀經』を指したるものとして十念々佛を別時意方便とするは、誤謬の



甚しきものといふべし。

次に我が七祖の中、第二に位し、特に本宗に於ては、他力教の根據ともいふべき『淨土論』を造りたまひし天親菩薩が、『攝大乘論』を釋して、其中に、唯願安樂往生は、別時意方便の說なりとのたまふこと、不可解の事なり、古來宗學者の中には、『淨土論』を造りたまひし天親菩薩と、俱舍・唯識・攝論等を造りたまひし天親菩薩とは、別人なりといふ說をなすものあり、又同人なりとして、『攝大乘論』を釋したまふときは、其所釋の論の隨釋なるが故に、姑らく別時意を述べたまへども、其自身の信仰告白の『淨土論』には、一心歸命速滿寶海の旨を述べたまふ、一は隨他意の釋、一は隨自意の論、敢て差支なし、恰も、眞宗の學者が、他宗の經論を講ずるとき

は其經論の旨趣によりて、辯述するが如きものなりといふ者あり、今思ふに、天親菩薩は往生淨土の教を、別時意なりと斷言したまふことなし、『攝論』を釋して、安樂世界に關する別時意をのたまへども、既に唯願とのたまへば、願行具足の往生淨土の教行は、別時意にあらざることを反證す、今禪師の宿善論によりて會通したまふ意によりていふも前にも述ぶる如く、經論相かなふて、理も亦たがふ所なし、況んや菩薩は『釋論』の終りに、本論の「智差別勝相品」第十の結文の

阿毘達摩大乘藏經中名攝大乘此正說究竟

といへるを釋して

衆寶界如覺德業　我說句義所生善

因此願悉見彌陀　由得淨眼成正覺

とのたまへり、『釋論』の「回向偈」も『淨土論』の「回向偈」も同じく彌陀佛に歸して、菩提を成ぜんことを告白したまふ故に、『攝大乘論釋』の天親菩薩も『淨土論』に於る天親菩薩も、同一人にして、同一の往生淨土見彌陀を要期したまふ菩薩なり、古來の宗學者の穿鑿は別時意の言に迷ふて、畫餅の論辯を費やせしにはあらざるか、猶此の事に關し、古哲の諸說の參照となるべきものを擧れば、淨土宗の乘圓の所述といひ傳へたる『群疑論探要記』に、左の如き意味の文あり。

問、二論同一師造、故不可相違者、道理不明、彼唯識論與法華論、俱天親造、而法華論依深密等意、宣五性

理所依說異、能依亦別、若爾誰知、淨土經中不明別時、故順所依經、淨土論且明念佛卽生、阿毘達摩說法相、故順所依經、攝大乘直判念佛別時、答曰、釋異部經、設雖一師有相違義、强所不遮、例如天親釋大小乘義懸隔、攝大乘論雖釋阿毘達摩經攝大乘品、而通判斷一代相違、凡夫往生、若別時意、何憚言唯簡去行、耶莫謂兩論所依異故、能依亦別、況梁論回向偈、全同淨土論回向偈、天親居地前位願生極樂

是は『探要記』著者が『攝大乘論釋』を造りたまふ天親菩薩と、『淨土論』を作りたまう天親菩薩と同一人なれば、念佛往生を別時意とのたまふ理なしといひしに就ての問答體の文章なり、問の意は、同一の天親菩薩にても『唯識論』を造りては、五姓各別を說き、『法華論』を作りては、一性皆成を說くにあらずや、淨土經中には、別時意をいはざる故に、『淨土論』には念佛卽生を述べ、『攝大乘論』には別時意を明す故に、『釋論』に之を布演せしにあらずやといひ、答の意は、一師にして別部隔異の經論を釋するは、相違の義を述ることもあるべし、『攝大乘釋論』には、通じて一代佛敎を判斷す、念佛往生もし別時意ならば、直ちに之を述ぶべし、何を遠慮して行を簡びて、唯願別時意などゝいふや況んや、『釋論』の「回向偈」と『淨土論』の「回向偈」と、全く同一意にして、西方題生の旨を述べたまふをや、天親菩薩は、決して念佛往生を、別時意とはなさゞるなりといふなり、此の『探要記』は『群疑論』の別時意會通の最初に

自二攝論至一此、百有餘年、諸德咸見二此論文一不レ修二西方淨業一

と慨嘆し、後に八意を擧げて、會通する中、第五に

淨土論與二攝論一、同是世親菩薩所造、寧容二世親製二淨土論一卽言二念佛得レ生二西方一、非二別時之意一、釋二攝論一乃曰レ念佛等是別時之意、非二卽得レ生耶

といへる文を釋せるなり、『群疑論』は、二論の作者を同人と定め、『攝論釋』も『淨土論』も、願生西方の思想は、一なりとする意なるが故に、『探要記』に其意を布演せしなり、抽老は、常に天親菩薩は、諸部の經を論述したまへども、其隨自意の信仰は、西方願生にありしならんと思ふ、前田博士の大乘佛教史論に、天親菩薩のことを叙して

淨土論の法義が、賴耶緣起論と全く關係なきものに似たるを以て、之を別人の所造ならんと疑ふものあれども、天親菩薩は北天竺の佛敎を唱ふると共に、又中天竺の佛敎をも宣揚したる人なれば、此人にして、淨土論の著述あるは、怪むに足らざるなり

といへり、近古長谷の碩匠林常は『光記』を引きて、『付法藏傳』二十四人中の、第二十一の世親と、無着の弟なる世親と、別人なるを、曇鸞等の同人と思へるは、名に迷へるなりといひ、日溪・法霖も、彼の鳳潭が、天親は法相宗徒なるが故に、五姓格別の主義を以て

大乘善根界　二乘種不レ生

といひ、二乘の往生を許さゞるを、曇鸞は曲解して、發生にして、往

生の義にあらずとすといふの來難に對し、『淨土論』の天親菩薩と、『唯識論』の世親菩薩とを別人とせり、今此等の說をも取らず『唯識論』と『淨土論』とは、別部隔異の論にして、隨自意の信仰は、『淨土論』にして、性相の決判、隨他意の釋義は、『唯識論』なりとし、『攝論』と『觀經』とは、此の集の說の如く會通して、天親菩薩は願生西方の菩薩なりとするに躊躇せず。

最後に禪師の意は、『觀經』を一往別時意の義を含むものとして、經論相符をのたまひたるやの疑問は、前の魏譯の論文を講ずるに就て、粗辯述せしが如し、日溪の『笑螂臂』に『觀經』の顯說は、一往別時意の義を含む故に、過去の因を閉づるに乘ずるとのたまふと辯じたれども、今は取らず。

此の集の別時意會通の論勢と、『玄義分』の會通の筆鋒とは、大に緩急の相違あり、禪師は經論の調和を主として、通論家卽攝論宗徒の誤謬を破し、善導大師は、論の唯願別時意は、我が『觀經』に關係なきことを辨疏し、經論を分離して、通論家の迷執を痛斥す、禪師の意を以ていへば、論を以て經を見れば、文表には見へざれども、其沒する所の宿因、隱す所の過去の善、これ遠生結緣の始なるを知る、其所隱所沒のものを取り出していへば、卽是別時意を成ずといふべく、經を以て論を見れば、論は宿善の始に就て、別時意をいへども、其多積宿因の結果によりて、獲得する十念の如きは、眞實語にして、別時意にあらずとの義趣を成ず。

此の宿善論は、此の集第一大門に、之を以て今日座下聞法の因緣、

容易ならざることを、『涅槃經』三恒値佛の文を引て證明し、此の別時意會通の張本とし、會通の條下に至りて、半恒河沙と、一恒河沙とを引きたまふ、此を以て、彼を見れば、其所謂座下聞法は、卽此の十念々佛の法と同一なることを知るべく、彼を以て此を見れば、三恒河沙の値佛は卽此の多積宿因なることを知るべし。

## 第十五章　十一番の問答

### 第一節　總論

此の『安樂集』第一大門は、別しては『觀經』の題號に依り、通じては『大經』・『正法念經』・『大集經』・『涅槃經』・『大乘同性經』等の經、及び『大論』・『寶性論』等の論に依りて、概して往生安樂の敎行を辯述し、第二大門は破邪顯正して、其安樂世界に入るの行を明して、第三大門に至りて、聖道・淨土二門廢立の基礎を立つ、破邪は外を防ぎ、顯正は內を守る、破邪に九番の料簡ありて、前に旣に辯ずるが如し、顯正は第一章の菩提心釋と、第三章の廣施問答・釋去疑情なり、菩提心は、名を准通に立て、義を別途に歸し廣施問答・釋去疑情は、念佛往生に就ての疑難を拂ふて、淨土の因果を闡明するに十一番の問答を設く、古來の宗學者此の問答を解釋するに種々の料簡をなす、今僧樸の著作せる講錄に依りて見るに、十一番の問答を四門に分類せり、左の如し。

—一善惡相對門二—
—一約無始相續繫業……第一問答

二約今生所造重罪……第二問答
二十念々相門三
一辯數法……第三問答
二明相狀……第四問答
三誡豫修……第五問答
三上下生相門四
一明上輩因緣生……第六問答
二明本願無生……第七問答
三明下機同契無生……第八問答
四明淨穢二身一異……第九問答
四稱名功德門二
一直明體德……第十問答
二揀示信不機嫌……第十一問答



此の僧樸の料簡によりて分類し其義趣を辯ぜん。

## 第二節　善惡相對門

此の第一門は、善惡の業擊に就て問答を設け、『觀經』下品の十念々佛の無始以來の業擊を斷じ、又業道先牽の理に妨げられずして往生するは、他力本願力の極致なることを顯して、信罪福の疑情を拂ふなり、今其要を取りて三在釋義の概略を辯ぜん。是この三在の義を了すれば、第一・第二の問答は、おのづから解し得べければなり。

三在釋義といふは、もと『論註』の上卷の終り八番問答の第六問答に出でゝ、此の集は之を相承せしなり、『論註』は『淨土論』の

普共"諸衆生" 往"生安樂國"

とのたまふ天親菩薩の回向句の意を註して、菩薩の往生淨土の同行者、卽所共の衆生は、如何なる機なるかを顯さんがため、『觀經』下々品に說ける五逆十惡具諸不善の機の命終の時に臨んで善知識に逢ひ、敎化を受け、至心に十念々佛して、往生するといふ文を引て、惡機爲本の願力を示し、次第に問答を重ねて、其十念々佛の力用の重罪を除滅して、往生する所以を述べたまふ。今は此の『論註』の文を擧げて、他力の極致を示し、信罪福の疑情を拂ひたまふなり、大意は業道に於ける佛說に依れば、天秤にて輕重の二物をはかれば、輕きはあがり、重きもの先牽くが如く、僅々少時間の十念々佛よりは無始以來造りかさねし惡業の力は、頗る重くして、先づ三途の苦報を牽くべきに、十念少時の力用先づ牽て、往生するは、何故ぞと、常途善惡罪福の道理に囚れたる疑問に對し、時間の多少は問題にあらず、十念の力よく極重惡業に打ち克つは、なす所の行業の動機たる心と、行業の緣と、行業の決定力とに依ることを顯開するにあり、然るに、此の在心・在緣・在決定の、三在の料簡に就て、古說紛々たり、或は、三在は心・境・時の三の力によりて、行力の顯るゝをいふと解し、妄念の心によりて起る五逆は力弱く、實相法たる名號によりて起る心は力つよきを在心とし、緣とは所緣の境を指すものにして、五逆の如きは能緣の心よ

り、妄境を浮べて造る所なれば力よはく、十念は最尊無比の阿彌陀如來の名號を境として起る念佛なれば、力强きを在緣といひ、臨終猛利の心力は、全く無後・無間の命終時なるより起こるが故に、平生の有後・有間の心よりちからつよきを在決定といふと解す。されど、此の義は眞宗の實義にかなひがたし。或は心・緣・時の三なりといひ、或は意樂と田と加行の三なりといふ。思ふに、いづれの義も、皆古哲熟慮の結果なれば、輙く捨つべきにあらざれども、在決定を釋して、臨終時なるが故に、猛利の心力、よく決定の働を起すといふが如き說は、平生の念佛は、決定を缺くといふ義に歸して、此の集前後の文意に應ぜず、平生業成の眞宗義にも矛盾するを以て取りがたし、『觀經』下々品の說相に依るが故に、



臨終時に就て、無後・無間の心力をのたまへども、是は寄顯にして、心力決定は、必ず臨終に限るとはいふべからず、鎭西の良忠の『論註記』西山の堯慧の『鈔』などは、皆臨終の猛利心力を以て解釋すれども、かくては、『十疑論』の別時意會通とも異る所なくして、別途念佛の宗致顯れず、眞宗義は之に從ひがたし、故に實義をいへば、平生といへども、後を期するの心なく、餘念を拂ふて、聞法するときは、よく名號を全領して、信行不二・能所不二の德を成じ決定往生の力用あるべし、蓮如上人の『寶章』に

後生を大事におもひ(無後心)佛法をたふとくおもふ心(無間心)あらはなにのやうもなく

とのたまふも、此の義なるべし、此の三在釋義は、『觀經』の說相に

寄せて、念佛の功用をあらはしたまへども、實義は然らず、此の十念を信心に望むれば、信行不二の義あるを在心といひ、名號に望れば能所不二の義あるを在緣といひ無後・無間の心に住して、よく決定に至るを在決定といふ、故に文の如く、心・緣・決の三在といふべし、他の穿鑿を要せず。



## 第三節　十念々相門

十念々相門といふは、第三・第四・第五の三問答を概括して、其所明を呼ぶ、其中初は十念と數へる法は、何々なるかを辯明し、次は其念佛の相狀を擧げ最後に懈怠を防がんために預修を勸めたまふ、今其要を取りて、之を辯ずるに、十念といふ言に三說ありて、六十の刹那を一念とし、之を十にすれば、六百の殺那、故に十念といふべし、然れども今十念々佛といふは、此の時節の十念にあらずして、一遍觀念をくりかへすを、觀の十念とし、又『往生要集』に

一心稱念南無阿彌陀佛、逕此六字之頃一念也

とのたまふ如く、六字名號を十回稱ふれば十念なり、此の十度觀念をくりかへすと十回名號を稱ふるとを、十念とするなりと釋し、行者其十の數を記すると記せざるとは、其人に依りて同じからず、久しく行じ習ひたる人は、自然に多念に及ぶ故に、記せざるも可なれども始て行ずる人は、懈怠を防がん爲に、數を記するも、亦可なりといふを、初の第三問答とし、次に觀念と稱名との相狀を擧げ、終りに眞俗二諦の理に依り、念々不可得の眞實智慧門に

住して、係念相續する上機と、差別の情を以て、有相の佛を念する下機と、皆往生することを述べ、最後に臨終十念のあればとて、臨終を期待して、平生相續を忘るべからず、平生によく心がけて念佛を修すべきことを明したまふ、之を十念々相門の大意とす。

然るに、數法の問答に就て、古來の宗學者中に、時節の念は簡去し、

但憶念阿彌陀佛、若總相若別相、隨所緣觀、逕於十念、無他念想間雜、是名十念

とあるは、觀念の十念にして、

又云十念相續者是聖者一數之名耳、但能積念凝思不緣他事、使業道成辨、便罷不用、亦未勢記之頭數也

とのたまふは、稱名に約すと解し、又の字を以て觀念に簡びしも



のなりといひ、宗祖聖人の『行卷』に引證したまふも稱名なるが故なりといふ、是亦一義、然れども、此の集の文面を見れば、觀の十念とはあれども稱名の語なし、又といふ隔別の字あれども、是は十念のものからの觀と、其記數の用否との義の差別を顯すためなり、『論註』を承けながら、

稱名亦復如是

の文字は省きたまふ、然れば、積念凝思は、やはり觀念にして稱名にあらず、『行卷』の引證は轉用のみ、勿論稱名の十念を遮絶するに非ることは、次の相狀の文に

或念佛本願稱名亦爾

とのたまへば稱名を遮せざることと知るべし。又『觀經』は臨終

に約して說けるも此の集此の處の文相は平生の機に約して

久行人念多應依此若始行人念記數亦好

とのたまふ、故に准通の筆格として、觀念を先とす『觀經』の說相は臨終の機に約するが故に、苦逼失念の情態に對して、轉敎口稱す、是憶念・觀想に能はざればなり、今は平生の機に約したまふ故に、准通立別の義勢觀念を先とし、聖道の機を誘致せんが爲に、觀に約して、十念を釋したまひ、次の相狀を明すにも、廣く觀念の相を列ね結勸の文にも、上機の二諦に達するの觀念と、始學者の依相觀とを明し、稱名は之に例同したまへり。

## 第四節　上下生相門

第六より第九に至る四問答を一括して、上下生相門の名を立つ、是第六問答は、上機の假名生を擧げ、第七は本願無生の生を擧げ、第八は實生を擧ぐ、上機下機も、本願無生の生に歸するときは同一の結果を得る之を淨土別途の德とする、第九の問答は前の三問答にて、天親・龍樹等の諸菩薩は、因緣假名のありさまを體驗して、緣中求往し、下品の凡夫は實生の執を離るゝこと能はざるも、無生名號力、よく其機を導きて、淨土に至らしめ、至れば卽ち土德として、見生の火自然に滅して、生卽無生の涅槃界に入るといふことは、分明となりたれども、此の色身を滅して、後に往生して、他

の色身を得るや、此の色身の儘にて、往生するとせんや、もし此の色身のまゝ往生すといはば、淨穢異るが故に、生ずべからず、又此の色身を滅して、他の色身を得るといはゞ、譬へば、此の燈を滅して、彼燈を燃すが如く、彼此各別、同一人の往生とはいふべからず、依りて、因果相續の義を以て、始終一行者の義を顯すを、第九問答の所明とす、此の第九問答も『論註』を承襲したまへども、義趣は轉用なり、『論註』は下品實生を執する機に關係せず、天親菩薩の願生に就て、衆生は畢竟無生にして虛空の如し、然るに、願生とのたまふは、如何なる義なりやと問ひ、之に答へて、もし遮情門に約すれば、天親菩薩の願生は、凡夫の實生を執するが如きにあらず、又表實門に約すれば、無生にして願生といふものは、是因緣生の



義なり、因緣生なれば假名生、假名生なれば固定的自性ある生にあらず、故に、無生にして虛空の如しといふ。要するに、『論註』は無生と願生と相妨げざるを明さんとしたまふより起る、故に、問の文に

問曰依何義說往生

とあり。此の集は、義の字を身の字にかへて

又問曰依何身說往生也

とのたまふ、是天親菩薩の願生に關する問答とせずして、前の三問答に連接して、色身に約して、問答を設けたまへばなり、故に、『註』の文を引き終りて、禪師は、更に結語を附加して

以是義故、橫竪雖別、始終是一行者也

とのたまふ、是義と指すものは、前文の因果相續不一不異の義をいふ、淨土假名人の色身と、穢土假名人の色身とは漏無漏・淨穢等同じからざれば、決定して一なることを得ず、然れども、因位修行の時より、果地悟界の色身に至る前後、刹那生滅し、連鎖やまずして、同一人の始終なること、譬へば、幼時の色身は、分子幾度かかはりて、老後の色身となる、唯色身のみならず、思想行爲すべて幼時とは異れり、されども、連鎖窮りなく、生滅の因果關係するが故に、幼時の養老保險の金は、別人にあらざれば、受取り得るが如し、故に、之を不一不異といひ、不一は因果二法の相望故に、又横といひ、不異は時間的繼續を意味するが故に竪といひ、横竪不異とのたまふ。月殊の『安樂集講義錄』に、不一不異横竪の義を註して



横並有二因果一、竪貫一相續一、因果相續、一異不可得

といふもの好矣。

## 第五節　稱名功德門

第十・第十一の二問答は如實修行の稱名の行相を開示し、其體德を顯し、信心正因の義に結歸す、第一章の菩提心と對照するに、彼は准通の名に依りて、別途の義を顯すを以て所詮とし、此は直ちに別途に據りて、稱名の如實不如實は、信心の力用に由ることを述べ、信心正因に結歸して

具二此三心一、若不レ生者無レ有二是處一

とのたまふ。彼此造語綴文異りといへども、所詮は、共に淨土別

途の他力信心にありといふべし、此の二問答の中、初の第十問答は、所稱の名號の德用を顯さんとして、先名體不二を明し、第十一問答は、正しく稱名の如實なるには、破闇滿願の益あり、不如實の稱名は、終日・終夜之を行ずるも破滿の益なし、益なき所以は、二不知・三不信による、之に反して、實相身・是爲物身なりと信知し、其信心よく、不淳・不一・不相續を離れたるものは、往生すと顯す、此の一節『論註』を相承しながら彼は五念門中の讃嘆門の釋、今は十念往生に就て、念佛の如實義は、信心にあることを顯さんが爲なれば『論註』に對照するに、迭相收攝の四字を以て『註』の展轉相成等の四十五字を括り、又『論註』は具に三不相成を示して、三信相成を略し、今は三信を表顯して、正因の義を顯したまふ『論註』の



具さなるものを略して、迭相收攝といひ『論註』の略なるものを布演して

若能相續、則是一心但能一心、卽是淳心、具此三心、若不生者無有是處

とのたまふ。彼此對照具略趣きあり、宗祖聖人の

三不三信誨慇懃

と讃じたまふ、其旨深矣といふべし。

此の第十・第十一の問答の文に就て、稱名破滿・三不三信・實相爲物・等の論題を立てゝ、古來の宗學者研尋に力を盡せり、然れども、今は多分を『論註』に讓り、其要を取り、迭相收攝の語によりて、宗因相成の義を辨ぜん、『論註』には三不を擧げ終りて